
various swoud

しょたくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

various sword

【Zコード】

N9007X

【作者名】

ショタくん

【あらすじ】

ある世界の物語、その世界には魔法が使えたり、モンスターが生息している。そんな世界のある魔法を使うのに長けた一族柊家、その長男である彼柊乖離^{ひいらぎかいり}は落ちこぼれだった。そんな彼が成長して学園へ！主人公最強なのです。

登場人物紹介 14話終了まで（前書き）

登場人物…整理やつとしました。

登場人物紹介 14話終了まで

柊 乖離ひいらぎかれい 15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中ほぼ5点、柊家特有の黒い髪（髪は長め）、黒い目、魔法系統は火、土、水、風、雷、闇、まだ出でない系統も：得意魔法…無し（というか使えない）かわりに刀に系統を纏う事が出来る。

この物語の主人公、元柊家の長男だつたが10歳の頃父に捨てられ、嚴さんと言う人に助けてもらう。鈍感

チーム祈りのメンバー、なんかもうリーダーになつてないかな？

厳さん、歳、不明

不明な事が多すぎる人、

今後の物語に出て来る…のかな？

捨てられた乖離を育て、学園に入学させた人物、
学園長と知り合いつぽい、

立花 裕香たちばなひやうか 15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中4・5点、水色の長い髪、翡翠色の目、得意魔法、水系統（本人は回復が得意らしいが本当は破壊系魔法が得意）

夜、男達に絡まれている所を乖離に助けてもらい好意を持つ。

チーム祈りのリーダー、なんか乖離がリーダーになつてないかな？…

峰倉 愛みねくらあい 15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中4点、真っ赤な短めの髪、真っ赤な目、

得意魔法、雷系統、身体の一部分に雷を纏える。

ただし乖離の様に長時間纏えないし、武器には一切纏えない、
乖離に好意を持つ…？

チーム祈りのメンバー

直江明なおえあかり 15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中4点、銀髪で腰まで届く長さ、蒼く澄んだ目、

得意魔法、闇系統、闇を自在に操り相手を錯乱させたりする。
乖離に好意を持つ…？

チーム祈りのメンバー

ルアーディケミスト15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中3・5点、金髪のちょい長めの髪、青い目、
得意魔法、火系統、火を自在に変える事で龍などを再現する、
顔はまあまあだが性格がウザイ為嫌われている。
乖離に対して酷くライバル意識を燃やしている。

チーム最強の勇者のリーダー、

田中成一 15歳、王立魔法学園1-Sクラス

容姿は5点中4点、茶髪で短髪、黒っぽい茶目、
結構なイケメン、だが女好きで知られている為あまり相手にされない。

乖離の友達、

得意魔法は…？系統、まだできない、

柊夏目 16 歳、王立魔法学園 2 - S クラス

容姿は 5 点中 5 点、柊家特有の黒い髪（とても長い）黒い目、得意魔法、闇系統と水系統で作り出す闇の氷魔法、乖離の元姉、乖離の事を溺愛する極度のブラコン、

柊祐樹 14 歳、王立魔法学園 2 - S クラス

容姿は 5 点中 5 点、柊家特有の黒い髪、黒い目、得意魔法、闇系統と風系統で作り出す闇風、才能がすごい為、飛び級で姉の夏目と同じ学年になった。乖離の元弟、乖離の事が大好きで極度のブラコン、

高梨梨花 17 歳、王立魔法学園 3 - S クラス

容姿は 5 点中 5 点、金髪碧眼、

得意魔法、火系統と土系統で作り出す…なんだろ？アレ？爆発？硬化？

とても綺麗で時々可愛い、現生徒会長、対抗戦で乖離の事を知り興味を持つ戦闘が大好き！

小椋奈央 17 歳、王立魔法学園 3 - S クラス

この人は…なんで出したんだろ？
まあ梨花のお目付け役的存在、脇役に近い人…ということで

アリア・ビュート 18 歳、ギルド唯一の現在最年少ランク保持者、

容姿は5点中4点、亜麻色の髪に茶色い目、美人

乖離がAランクになつた事で決闘を仕掛けってきた女、ただ一人の乙

ランク保持者、

得意魔法、オリジナル魔法、衝突魔法 火系統

今後にも出て来る…？

三月柚子 14歳、王国魔法学園中等部3 Sクラス、
容姿は5点中4 . 1? 金髪碧眼と会長に似ているが…
顔が童顔な為見た目より幼く見られる。

得意魔法は水系統と風系統で作り出す風水、

乖離の事をお兄ちゃんと呼ぶ、本当の兄妹ではない。
(このキャラの表現は本当の妹、と思う方もいるかもしれません)
私の文才が無いので義理の妹と書けませんでした…。ごめんなさい)

柳良和 14歳、王国魔法学園中等部3 Sクラス、

容姿は5点中3 . 5点、茶色の髪を逆立てている。目の色は灰色、
負けず嫌いでプライドが高い。柚子に気がある…のかな?
得意魔法は雷系統、

歌山ほのか《かやまほのか》 14歳、王国魔法学園中等部3 Sク
ラス、

容姿は5点中4点、眼鏡を掛けたショートボブカット、
柚子、良和のお母さん的存在、

得意魔法は水系統回復専門、裕香の正反対、

なお、この登場人物は私（作者）が考えた結果ですので気に入らない場合は自分で想像してよりよい作品にしてもらいたいです。僕の頭ではこんな感じ…ですね。

登場人物紹介 14話終了まで（後書き）

この後は「G-Dラゴン」と乖離はどうなるかですね…
では15話でお会い出来ることを

プロローグ（前書き）

初めまして、いんにちは?
作者文才ないですが、、、見てくれるのであれがよろしくお
願いします

プロローグ

この世界には魔法が存在する。俺の一族は代々その「魔法」に長けた一族だ。

俺はその一族の長男……だった。

俺の名前は柊乖離（ひいらぎ かいり）

この時の俺は魔力があるのに魔法が使えない、落ちこぼれだった。でもそれでいいと思った、いつも楽しく1つ上の姉や1つ下の弟と、そんな楽しい時間が続くと思っていた。

あの日までは…

俺は父様に呼ばれて修練場に来ていた。代々魔法の練習をしてきた由緒正しい修練場、だがそこでこんな事を言われた。

「乖離、今から私と戦え、もし私に1回でも攻撃を当てる」とが出来たらいいだろう、だがもし1回も攻撃出来なかつたらわたしも考えなくてはならん。」

こんな事を言つてきた、

「何故ですか！なんで僕が父様と！」

「いいからやるんだ、話はその後だ、」

「分かりました、やります。」

俺は決意して父様に向かつていった。

結果は惨敗、一撃も加えられなかつた、姉や弟でも一回へりこ当てられるのに、

そんな考え方をしていると父様はこう言つた。

「お前はもうこの家の人に間ではない、わざと何処へでも行け、と勿論、反論はした、だが

「父様つ！ 嫌です、此処に居させてください……今までよりもちゃんと魔法が使えるようになります！ だから」

「うるさい！ わざと何処へでも行け、」

この言葉の後に衝撃の言葉をぶつけられた、

「お前はもう私の息子ではない！ わざと何処へでも行け！ だがせめて名だけはその名をくれてやる！ 感謝しろ」

この時、俺は10歳の誕生日を迎えていた、

プロローグ（後書き）

はじめました！
では1話でお会いできること、
、

第1話 学園、夜の街（前書き）

1話目の投稿です。
よろしければ見てください

第1話 学園、夜の街

そして現在、俺はある人に助けてもらひ、15歳になった、そしてある人は言った。

「お前には色々な事を教えた、だが1つだけ教えてないものがある。それは人との触れ合いじや、そこで今からお前にはある学園に行つて貰う、

ちと時期が遅いがこの手紙をその学園の学園長に出してくれ、そうすれば多分入学できる。」

ある人はそう言った、俺は…

「分かりました、行つてきます。」

そう答えた、でも実際ちょっと楽しみだつた、

「やうが、では生活に必要な資金は私が用意しておぐ、あとは自分で稼げ、お金の単位は

テラ(ト)1円=1トじや、入学費は必要ないじやろひ、だから一応100万ト渡しておぐ、
じゃ行つてこい、」

「はい、行つてきます。」

学園はルソス王国にある王立魔法学園と言つたが前からじい、俺は歩き出した、楽しみな学園生活の為に

そして今学園長室に至る、そこで話してこる。

学園長は体格がとてもいい、身長は180cmくらいだらうか、とても堅実そうな顔をしてこる。

「それで君はこの学園に入学したいと
「はい、一応親というかそんな感じの人から招待状を預かっています。」

「ならその招待状とやらを見せてくれるかい？」

「はい、貴方に渡せと言っていたのですから」

俺はそう言い招待状を渡した、学園長はそれを見た途端硬直した。

「あの、どうかしたんですか？」

「君！これは本当に厳の書いたものなのかな？」

学園長は目を見開き聞いてくる、

俺はそれに対し確かにその人の名前は厳だ、と告げる。
そう、俺を助けてくれた人の名前は厳と言つ、

「厳の息子という事か、血は繋がらなくとも期待大だな。」

学園長はそんな事を言つてくれる、今でも魔法を放てないと言つのに、

「よし、君の入学を認める、ようこそ王立魔法学園へ柊乖離君君を
歓迎する。」

「ありがとうございます。」

「そうと決まれば授業に必要な物は私が全て用意しよう。勿論住む所も決まってないだろ？から私が確保しよう、そこでちよつと待つててくれ。」

学園長はすうい上機嫌になり全ての用意をしてくれた。

そして確保してくれた家に行くと俺は驚愕した。

先程確保したとは思えない程、一人暮らしには勿体無い、

机の上には制服と俺が行くクラスの組の発表用紙、とにかく贅沢と言つて良かった、

学園長に感謝しつつ自分の武器の手入れをする、

俺の武器は一本の刀、魔法を使う者は皆杖とかが主流だ、まあもつとも俺は魔法が使えないから意味は無いが、

気付けばもう夕方だった。俺は軽く夕食を済ませ暇なので夜の街にくりだした。

夜の街は思ったより静かだった、横から抜けてくる風心地いい。そんな風の音の中から悲鳴めいた声が聞こえた。

裏路地で4人の男に囲まれてる少女、ロープを被つていて顔は見えない、俺は面倒ながらも男達に声を掛けた。

「何してるんですか？」

最初は丁寧語で話しかける。事情があつたら失礼だ…最もそんなの無さそうだが、、、

男達はゆっくりと此方を振り返る。皆、醜悪そうな顔をしている。

「なんだ？お前、お前もこの女みたいに奴隸になりたいのか？」

男達はゲラゲラ笑いながら少女の方を見ている。

見られている少女はガタガタと震えており怯えているように見える。それもそうだ、この世界では人を奴隸にする事を禁じている。

「おい、なんとか言えよ小僧、

でもお前中々、いやいい顔してるな？裏で売れば高く売れるかもな？」

また笑いだす。

これで男達の運命は決まつたようだ。

「お前ら、さつきから丁寧に話してやつてたらなんだ？それ。」

俺は口調を変える。

男達は一瞬焦つた様だがすぐに怒り出した。

「てめえ、ボコしてから奴隸にしてやるよ。」

言つた直後、男の一人が突つ込んで来る。

俺は闘氣を纏い、後ろに跳躍する。

闘氣は厳さんの教えてもらつた、

”魔法が使えないからそ魔法を万が一に避けるために、

数メートル後退して片足が地面に付く直後にまた足に力を込める、
次の瞬間には俺は男の目の前に迫り、腹に拳がめり込んでいた。

「これで一人、さあ次は誰？」

俺は軽く笑い、闘氣を最大の4分の3くらい纏う、

男達は闘氣に圧されて動けない、

俺は刀を抜き放つ、かつて厳さんから貰つた？練習用刀？

「覚悟しろよ？」

俺は男達に言葉を放ちその後高速で峰打ちをした。

3人ともピクリとも動かなくなる。

俺はそれを確認して刀を鞘に戻す、

そして襲われていた少女に振り返る、

「大丈夫か？ 怪我とか無い？」

一応聞いてみる、少女は

「はい、ありがとうございます。えっと助けて頂いて。」

少女は下を向いたまま、動かなくなる。

「そう、なら良かつた、じゃあ俺は行くから、
待つてください！」

行こうとすると少女に止められる。
何かと振り返ると少女はロープを取つて、

「私は王立魔法学園1・Sクラスの立花裕香たちばな ゆうかです。

えつと、貴方は？」

「俺？ 俺は柊乖離、15歳、まあこんなくらいかな？」

「え？ 15歳つて私と同い年ですか？」

「15歳なんだ？ じゃあ同い年じゃない？」

「え？ でもそんなに強いのに何故学園に入らないんですか？」

この言葉に俺は苦笑した。何故って俺は欠陥品だから…

「まあそのうち会えるよ… 多分、

ていうかなんで学園に入つてないって分かったの？」

俺は素直な意見を口にする。

彼女は笑いながら答える。

「だつて貴方みたいなカッコいい人は見たことが無いって…」

後々声が小さくなってきたが気にしないでおこう。

「じゃあ、俺は行くよ。じゃあまた明日。」

「はいまた明日」

俺は挨拶をして帰る。向かうのは宿、明日寝坊しないように早く寝なければ、

俺は鬪氣を纏い全速力で家に帰り、フロに入り、寝た。

明日の大切な楽しみに備えて…

第1話 学園、夜の街（後書き）

第1話目入りました！

いよいよ次回主人公の学園生活が始まります
では2話でお会いできることを、、、

第2話 初登校、再会（前書き）

こんにちは2話目です。

もう少しあと更新したいんですが時間が、
暇だつたらよろしくお願いします。

第2話 初登校、再会

彼女は考える。あの少年は何だつたんだろうかと、結局、あの後家に帰り考えたが分からなかつた。

学園にいる1年生なら大体知つてゐる、でもあの少年は居なかつた。珍しい容姿だつた。黒髪黒目で顔は可愛い、カツコいで言つたらカツコいい、

まああの顔が嫌いな人はそう居ないだろう。

心当たりはある。がそれは多分ない、学園で黒髪黒目の人物が2人居る。

現在2年生の柊家長女、柊夏目、

ひいらぎ なつめ

14歳なのに飛び級の成績で2年生の柊家長男、柊祐樹

ひいらぎ ゆうき

この2人はとても有名だ。柊家と言つこともあるが、、、

姉は絶世美人、弟はとても可愛い子供？

この2人は分かる、だがあの少年は彼らと雰囲気が似てゐる。

でも柊家は子供が2人のはず、それは無い…と思つ。

しかもあの少年はまた明日と言つた。まるで明日会える。みたいな言い方で、

とにかく分からぬ事が多すぎた。だから寝ることにした。明日になれば分かる。と無理矢理納得して、

朝、俺は眠い目を擦りながら制服へと着替える。

青を基調とした生地に所々赤でラインが引いてある上、下はチェックのズボン、

襲われた用に防御結界が少し施してあるらしい。

「さて、初登校だ。」

俺は聞いてる人も居ないながら喋る。

だがその言葉は自分に言った言葉でもあつたが、

学園までは歩いて3分、結構近い、これも学園長の計らい、俺は早歩きで学園へと向かつた。

学園に着いてすぐに学園の職員室で説明を受けた。

言い忘れたが俺は1-Sクラス、昨日の子も確かそうだったが、クラスはS～Eまである。それぞれの能力でクラスが分かれる。Sが最強、Eが最弱、まあ魔法が使えない俺が何故Sなんだろうかと疑問に思つたが、

まあいい、そこへ俺の担任に当たる先生が来た。

「始めまして、柊乖離君、私は貴方の担任となる大山葵おおやま あおいです。
どうぞよろしく。」

20代くらいの女の先生が笑いながら自己紹介をしてきた。
俺も自己紹介をして早速クラスに案内される。
クラスの前で此処で待つてと言われ中で先生が話している。

「はい、皆さんおはよ。早速ですが今日は編入生を紹介します。

先生の言葉で皆がざわめきだす。

「先生！女ですか！？レディーですかあ！」
男の声が聞こえる…「イツ馬鹿だ。

「男の子には残念ですが男子です。」
それを聞いた男子達の悲嘆の声が聞こえる。（マイエンジール！君
は…）とか言つてるぞ、
先生が付け足し始める。

「ですが女の子の皆さんは嬉しいかもですよ~。」

「カッコいいんですか！？」

女子の一人が質問する。

先生は、

「私が奪つちゃいたい位です！」

先生が爆弾発言をする。今のは幻聴か…？

「まあ早速出てきてもらいましょう。乖離君入ってきていよいよ。」

先生の声が聞こえたので扉を開ける。

視線の先には数十人の俺と同い年の人達、

男子は口をあんぐりさせて此方を見ている。

女子は…顔を真っ赤にして此方を見る者、顔を下にして不気味に笑つて居るもの、

はたまた、（神様！有り難う！）と神に感謝してる物、それぞれ、ふと目が合つた少女は昨夜会つた少女で俺を見て放心している。改めて見ると…うん、とても可愛かった。要するに美少女、

「始めて乖離です。どうぞ皆さんよろしく」

俺は教室での最初の一言を発した。

女子は黄色い声で叫んでる者多数、男子は…うん、察して

「じゃあ親睦を深める為に質問したい人いますかあ？」

先生がこんな事を言い出す。

「はい、乖離君？ 単刀直入に聞くけど彼女は居ますか！？」

「いません。」

「はい、好きな人はいますか？」

「いません。」

「は～い、自分は強いと思いますか？」

「思いません、寧ろ最弱ですかね・・・」

「はい、昨日会った時のあれはなんですか？」

「つ～やあここんちにはアレは刀術ですよ？俺魔法使えないですしね？」

「闘氣も纏つてましたよね？」

「…はい。」

昨日の女の子の尋問、他の生徒からは（知り合い？）（裕香あ抜け駆けだめえ）

（闘氣つて嘘だろっ！）（魔法使えないのかよ…）… etc

「单刀直入に聞きます。貴方は柊家の人がですか？」

俺は一瞬体を強張らせた。だがすぐに冷静を装い、

「柊家と言つのはあの魔法で有名な一族ですか？」

私がその者だと…？あり得なくは無いですか？あの家は2人しか子供は居ないはず

確か16歳の長女と14歳の長男が居るだけの気がしましたが…？

なんとか答えた、とどめに

「それに僕は魔法が使えない、

そんな人間が魔法最强の柊家に居るわけ無いじゃないですか？」

こう答えた。彼女は少し考え、そして、ありがとう言つて席に着いた。

しばしの沈黙、その沈黙は先生によつて破られた。

「あの～皆さん、乖離君の実力なめてません？」

先生はこんな事を言つた。本日2度目の爆弾、

生徒は日々にだつて魔法使えないんでしょ？などの質問、

「なら先生の提案で、乖離くんと模擬戦しましょうか。」

…ハイ来ました。本日3度目の爆弾、

その言葉に反応した男子、約1名、

「先生、僕にやらせてください。」

言つて男は立ち上がつた。金髪碧眼、容姿は美少年、

「その男、気に入らないのでぶちのめします。」

・・・性格最悪、

すると聞こえてくる監の声、（まさか、アイツ男子学年主席だぞ？）

（乖離君大丈夫かな？）

おいおい、物騒だな！男子学年主席つて1年男子最強だろつ！？

「おい！お前、調子に乗るなよ？いますぐ校庭に来い、
つぶしてやるよ。その気に入らない態度も、口調も全てなつ！」

俺は決めた。ここ等にはもう普通の口調でいいな。と

「黙れ、学年主席か、いいねえ、潰してやるよ。」

この声を聞いた誰もが耳を疑つただろう、
もう一寧じやなくていいよな？心に質問して納得、
すると聞こえてくる昨日の少女、裕香の声、

「アンタ、初日で素が出たわね？」

「ああ、もういいや、これでいいや

俺は彼女に笑いながら答える。

彼女の周りには女の子達、（あれつて乖離君の本性？カッコいいー）
などなど

「おー！俺を無視するな、わっせといくべ。」

「ああ、すぐ行く

俺は彼に着いていき、皆は俺についてきた。

現在場所は校庭、俺の田の前にムカツク金髪、周りにはクラスの人々、

「ルールは簡単だ、どちらかが戦闘不能、もしくは降参した場合、これでいいだろ？」

「俺はいい。とにかく早くはじめよ！」

俺がそう言つと金髪は笑い、自己紹介してきた。

「僕の名前はルアーデ＝ケミスト、君が負ける相手の名前だよ。」

俺は無視して、先生に合図を促す、

「では試合開始、」

先生の合図とともに試合が始まった。

「おい！金髪、お前の最高の魔法をぶつけてみるよ、

「ふん、いいだろ。後で後悔するなよ？」

「上等、」

俺は彼を挑発して彼の実力を見るにした。

「我の忠実なる炎の精靈よ、汝力を此処に示せ！

炎陣の鉄槌！（フレアドライブ！）」

彼の詠唱魔法が俺に飛んでくる。俺は静かに言葉を唱える。
結果的に彼の詠唱魔法は俺に当たった瞬間消えた。

「つ？何故！僕の魔法が消えた！」

そこには無傷の乖離の姿、

「どうした？学年主席ってのはこの程度か？聞いてあきれるな？」

俺はさらに挑発、

「つるさいつ！みてる！

灼熱なる業火よ龍の姿表し我の前に顯現せよ！灼熱業龍！（ボル

ケーノー！」

今度は龍の形をした炎の塊、だが所詮は炎の塊、

「ディスペル」（四元素魔法拒絶）

俺はこう唱えた。それだけで龍の姿をした炎は消えうせる、
金髪はもう立つてただけだつた。

「主席はやはりこんなもんか？じゃあ消えろ、
俺は刀を抜く。そして纏うための詠唱を始める。

「纏い、風刀。」

彼の刀に膨大な風の魔力が纏い始める。

皆驚いていた。学年主席の魔法が通じない、
そして彼の刀に驚いた。刀に彼は風を纏つている。

本来武器に火、風、土、水を纏うには膨大な魔力と膨大な精神力が
必要、

使える者なんて聞いたことが無い、

だが彼は使っている、風を、

私はそんな彼をカッコいいと思った。

その時、彼女の初恋が始まった、詳しくは立花裕香の初恋が・・・

俺は魔法が使えない、だから敵さんに武器に魔法を纏えと言われた。
最初は意味が分からなかつた。

1年でようやくつかんだ俺専用の魔法、

魔法を纏う武器、（刀）魔法刀、これは俺が勝手に呼んでる。

俺専用と言うのは、魔力が極端に多くて、魔法が使えない者のみが
使える魔法、

だから今の所俺専用、厳さんいわく、お前しか使えないそつだが、
そして今それをつかつた。

金髪に力の差を見せる為に

「じゃあな、風刀、波風」

俺の魔法を唱える。

俺は一瞬で彼に接近、それに気付いた彼は炎で出来た盾を張った。

「無意味だそんなもの」

そんな物は意味が無いのに、

俺の風を纏つた刀は斜めに盾を切った。

刀が触れる直後に炎が消えていく、

そしてその一撃がもたらした風が、彼の元へ届く、

そして彼は吹っ飛んで壁に激突、

「だから無意味だと言ったのに」

彼は先生に連れられて保健室に、俺は生徒から尋問を受けた。結局、ディスペルや魔法刀の事を全部聞かれてしまった。

ディスペルは魔法の四元素全てを纏い、魔法を拒絶する。

口では簡単だが無理だ、普通の人なら一元素が限界、強い人でも二元素、

俺は4元素使えるあと他の系統が4つあるが。四元素はばれた。残りは…

まあその後女子から食事に誘われて午後の授業を受けて終了。

俺の始めての学園生活はこんな感じにスタートした。

第2話 初登校、再会（後書き）

いよいよ始まりました学園、
ただちょっと主人公の力見せすぎかな…なんて考えたりして、
では第3話でお会いできることを

第3話 グループ（前書き）

こんには、3話目です。
最近忙しい事があります。
少々投稿が遅れるかもしませんがよろしくお願いします。
では、どうぞ

第3話 グループ

次の日、俺は学校でグループを決めることになった。

グループとはクラス対抗戦やギルドの依頼と一緒に受ける、いわゆるチームをクラスで作る事らしい。俺は編入したばかりだからまだグループが決まっていない。

「じゃあ乖離君のグループ決めるわね？ 単刀直入に乖離君欲しい人？」

幾つものグループ代表が手を挙げた。その中には裕香や昨日コテンパンにしてやつたルアーデの姿がある。

俺は正直何処でも良かつたが話す相手が居た方が嬉しい事は確かだつた。

「うわ～すごいですね？ 乖離君の人気、」

先生が喋る。

「でも乖離君はもう先生の物だからどこにもあげない。」

「爆弾発言、、、

「ねえ乖離君？ 良かつたら先生と一緒に（いやです）、、、うつうつうつうつ」

先生、「冗談じや無いんかい！」

「もういいわよ、先生怒ったわ、はい乖離君欲しい代表、なんで欲しいか言つてつて

先生もうヤケクソになつてるなあ

「先生、乖離はこの僕、ルアーデのグループである

“最強の勇者”に入れるのはいかがですか？」

「チームの詳細を詳しく教えてあげなさい。」

「いいでしょ、よく聞くんだよ？ 乖離、僕のチームは僕を入れて6人、男子3人女子3人のグループさ、どうだい？ 僕の配下にしてあげるよ？ 入りたいだろ？」

心の声 コイツうぜえ

「さあ乖離答えを聞こうか？ まあ勿論決まっているだろ？ がね？」

「では、いやです、」

即答する俺、

「そうだろ？ だつてこの僕がリーダーなんだから入りたいのは当然つてなにいい！」

驚愕するルアーデ、

「ははは、君面白い冗談を言うんだね？ 理由を聞いてもいいかい？」
「いいですよ？ まあ単刀直入にリーダーがうざいです。 これくらいですかね？」

「僕の責任なのかい？ ！ ？ なあ君達、僕ほど完璧なものは居ないと思わないかい！」

周りを見渡してクラスの全員を見るルアーデ、
対するクラスの皆は白い目でルアーデを見ている。

「嘘だ、こんなにカッコよくて性格がいい僕が嫌われているなんてつ！」

コイツ、あほだ。

「はいはい、そこに居るアホはほつといて他に志願したいグループ居る？」

先生、悪魔だ。

「はい、先生、乖離君には私の率いるグループ、“祈り”に入つて

もらいたいです。」

声を挙げたのは裕香だった。

「はい、裕香さん、貴方が男子に興味を持つなんて珍しいわね？それで理由は？」

先生は理由を聞こうとする、それに裕香は顔を少し赤くしながらも答える。

「私、実は乖離くんに此処以外で会つた事があるので一番話しやすいかと、」

「それだけ？本当にそれだけ？」

先生が言及している。裕香は顔を真っ赤にして、それだけです、の連呼

「で、乖離君的にはどうなの？裕香さんのグループに入つてもいいならいいけど、」

「別にかまいません、寧ろ話す相手が居てくれた方が安心しますし、

「そ、じゃあ裕香さんのグループはただいまより乖離君を加えて女子3人、男子1人のグループとなります。少々他のグループよりは少ないのでまあ大丈夫ですかね？」

じゃあ乖離君は裕香さんのグループで自己紹介でもしてて、と言つて先生は出て行つた。

チヨットマテ、先生はグループ男子一人と言つてたよ、

「何してるの？早く行くわよ、」

裕香が俺を急かしてくる。

「裕香さん？もしかして男子つて俺一人？」

「そうよ、良かつたわね？他の2人は美少女よ？あと名前で呼んで、

私も名前で呼ぶから

「分かつた。お前は違うのか？」

「違うって？」

「いやお前だって十分可愛いだろ？」

「つーー！」

途端に顔を赤くする裕香、俺、なんか悪いこと言つた？

「もうつ、バカッ！さつと行くわよ。」

「待てよ、裕香～」

着いて行くとテーブルに2人の女子が座つていた。

「とりあえず乖離、座つて。」

裕香に言われ座る。

「まずは自己紹介ね？私は裕香、もう知つてるでしょ？」

「ああ、お前のことは知つてる。」

「そつなら貴方自己紹介しなさいよ。」

「おつと、俺は柊乖離だ。えつと3人ともよろしくになるのか？」

「よろしく～乖離っち、私、みねくらあい峰倉愛愛でいいよ。」

「……直江明……よろしく、私も別になんて呼んで貰つてもかまわな

い

「ああ、よろしく～えつと愛と明、俺もなんて呼んでも構わない。」

2人は対照的だった。愛のほうは元気な可愛い女の子、一方、明には冷静で綺麗な女の子、と言つた所か、

「はい、自己紹介終わつたわね？一応、得意魔法とかも話しひきましょうか。」

「私から、私は水魔法の回復系統よ、」

裕香が言つ。

「私はね！雷の魔法が得意なんだよ～」

と愛、

「…得意魔法、闇、」

と明、

「へえ明は闇が使えるのか？すうーになあ。」
俺はそういうて笑つて見せる。

「…そんな事…無い、貴方の方がずっと…すうー」
明の顔が少し赤くなつたが、氣のせいか？

「ねえ乖離つちー？質問なんだけど、乖離つちつて自分の顔の事自
覚してる？」

「突然なんだ？愛、それはどういう意味だ？」

「もういいよ、まあとにかく明篭絡だね？裕香はもつむれちやつて
るのかな？」

愛がそんな事を言い出す。

「バカツ、私は篭絡などされてない！」

なにやら言つている裕香、

「いいじやん、私ももう攻略されてるから、
早くしないととつむやつむ、乖・離・君。」

それを聞いた途端裕香は黙つてなにやら考えている。
少し考えて、

「負けないもん。」

「負けないよー！」

「…勝つ」

と上から裕香、愛、明の言葉、

「あの？さつきからなにを話しているんだ？」

「…「関係ない！」」「

ハモつた。

「とにかく、今日は解散ね？明日はなんか模擬戦みたいのやね？」
いからそこで色々と決めましょー。じゃあ皆、解散」

そうやつてグループ結成1日目が終了した。

とにかく俺はグループ、祈りのメンバーになつた。

第3話 グループ（後書き）

グループ決めました。この後はチームクラス代表を決めると思います。

では4話でお会い出来ることを、丶丶

第4話 模擬戦（前書き）

こんにちはっ、時間があつたんでもう一話投稿しました。
僕、ストックとか作らないので次は遅くなるかもしれません。
なるべく早く投稿しようと思いつますので今後共よろしくお願ひします。

あと、感想などお待ちしております！

第4話 模擬戦

そして次の日、今日はクラス代表のグループを決める模擬戦があるらしい。

「てな訳で1位取っちゃうぞ」「オー」

「…オー？」

「なんだ? このノリ、「

「同感」

こんな感じでグループやつてます、ハイ。

「3回勝てばクラス代表だよ」

「そうなのか?」

「ええ、ルール的にそうなつてるわ。」

「…負けるのは悔しいから、や」

だそうです。早速1回戦です。

1回戦の相手は同じクラス、当たり前か、

グループ“疾走の追及者”という名前のグループらしい。

「これより! 1・Sクラスによるクラス代表決定模擬戦1回戦を開始します。」

先生の合図によりどんどん指定の場所に着いていく。

俺たちは校庭、相手は6人だ。男子4人の女子2人のチーム、

「両チーム前へ、」

審判が合図をする。

「それでは戦闘はじめっ!」

「私の実力みててね?」

と言つて愛はその場から消えた。

敵の方を見ると男が一人倒れていた。

「これが私の実力だよん！」

愛が目の前に現れる。

「雷で足を活性化したか。うまいな？」

「でしょでしょ？」

「無視するなあああ！」

男が一人斬りかかってくる、武器は斧だ。杖を使わないのは珍しい、と、男の斧が黒い霧によつて動きを止めた。

「…私も強い？よ、」

「…闇槍 沙羅夜」

明の手には黒い槍、それを突いて男の斧を弾きその隙に槍を横に薙ぎ男を倒した。

「…ブイ！」

「お前ら強くないか？」

「そんな事は無いわ、ていうか貴方に言われると嫌味にしか聞こえないわよ？」

後ろには残りの4人を殲滅していた裕香、

「裕香、お前そんなに強いのならなんでの時襲われてたんだ？」

「足が竦んじやつたのよ！」

涙目になる裕香、

「あ～あ乖離っち、裕香泣かせた～もうこれは次の戦闘は乖離っち一人でやらなきやね？」

「…同感」

「そうね。それなら許してあげるわよ？」「

「何故そなうる…！？」

3人は笑い、俺は逃げられなかつた。

「お前ら…グルか。」

俺はこの人達を怒らせてはダメだと悟つた。

2回戦目がはじまつた。

約束どおり俺は一人で戦うらしい。

「両チーム、前へ、」

相手は4人、全員女子、正直やりづらい。

「戦闘開始！」

戦闘が開始してすぐに一人の女子が目の前に居た。

「はっ！」

女は剣を振る。早い

その後も俺はあしらい続けた、女の方は疲れてきたみたいだ。

「ごめん！」

俺は闘気を纏い女の背後に回り刀の鍔で殴り気絶させた。

そして次の瞬間、目の前に膨大な光の塊がある事に気付いた。

「つ！」

咄嗟に右に飛んで回避した。

「あら？ 私の光魔法効かなかつたのかしら？」

女は笑いながら俺に聞いてくる。

「いや、あともうちょっとやばかつたら危なかつた。」

「そう、でも貴方本当にカッコいいのね？ 近くで見るとやばいわ。だから私が貴方を倒して介抱してあげる。」

女は笑いまた光魔法を放つてきた。

「纏い、水刀」

「水刀、水舞欄」

俺は刀に水魔法を纏い光魔法とぶつかり相殺した。

「何故ツ！ なんで水なんかが光と相殺に！」

女は一瞬驚愕したがすぐに笑い、

「すいません、もう手加減できませんね？」

天を繋ぐは我的閃光、貫け、光の虚剣

女の前に眩い光を放つ虚剣が現れる。

「さあ踊りましょう？」

女は俺にその剣を叩きつけてきた。

「くつ！」

俺はかろいじて避けて策を練る。

「水刀、水破天虐！」

そして今までよりも膨大な水の魔力を纏い、縦に雍いだ。一振り、たつたそれだけで形勢が逆転する。

なんせこの水破天虐は一振りで何発もの水の刀が四散する。水は圧縮して放つと鉄でも切れる。その鋭い水の刃が光の虚剣へと当たり、弾けた。

「つ！？」

彼女もこれは驚いているようだ。

「どじめで、水刀、小波」

先程とは打つて変わつて微量の水の魔力を纏い、彼女の体に軽く当てた。

普通の服ならこれでも致命傷、あるいは死んでる、だがこの学園の制服は結構強い、

彼女の体には傷一つ付いてないだろう。まあ衝撃は来ると思うが、彼女が倒れた事で模擬戦は終了、よつて俺達は決勝へと進んだ。

「乖離つち」正直に答えてね？人間？」「化け物？」「どつち？」「貴方、何者？」

「私はもう慣れちゃつたけどね、でも光を水でつて……ねえ？」

「お前ら勝ったのに酷いな？俺精一杯やつたんだぞ！」

神様！この人達は悪魔ですか？

「まあそれは置いといて次の試合はルアーデのチームよ？」

「ああ、あのカスか、」

「乖離つち、カスつて一応学年主席なんだよ？」

「アイツ弱くないか？」

「まあねえ、でも乖離が止めたあの炎の龍、私じゃ受けれないんだよねえ」

裕香が悔しそうに話す。

「あんなの軽い方だろ？」

「…貴方は問題外、」

またさりげなく否定されましたねえ、はい！

「まあそんなのも柊家、姉弟に比べたら貴方が重いよって軽くいらっしゃうだろ？」「

なにかを言及するような裕香、俺は少し顔が引きつったがすぐに戻し、

「そんなに強いのか？柊家は、」

「ええ、強いわよ？貴方みたいにね？」

「何が言いたいんだ？」

「私に教えてよ、貴方柊家の者なんでしょう？」

俺は答えようか迷つたがしばし考えてこう答えた。

「今はもう柊家の者じゃない。俺は柊乖離、関係の無い事、ただそれだけだ。」

「…そう、『めんなさい』でも貴方、そのうちばれるわよ？」

「まあ、なばれたらばれたで仕方がないことだ。普通に暮らすぞ。」

「そうよね、じゃあ次の試合行きましょう。遅れるといけないわ。」

「ああ」

学園に入つて数日、一人に俺の存在がばれた。

「こりや案外早く見つかるかな？」

俺は空を見ながら言った。その空は青く蒼く澄み切つっていた。

「ハツハツハ乖離、今日は貴様を倒して見せるぞ！相手をしり…」

「いやだ、」

「よ～しそれでこそ男…じゃあ俺と…なにいいい…」

「お前なんかキャラ変わってるぞ？」

「知らん！作者に聞け！そんなことより勝負しろ…」

「やだ、だつてお前弱いし、ウザイし、生理的に無理だし、、、」

「酷くないか？乖離？」

「俺に勝てたら認めるよ。普通の接し方をね。」

「いいだろう！今日こそはお前を倒す！」

「と言うことで裕香と愛と明は他とお願ひ。」

「まあ良いけど…」

「アハハ、乖離っち、負けたら奴隸ね？」

「…賛成」

「酷くないかつ！」

「じゃそれで、」

裕香、明、愛、狂いました！

「じゃあ早速、やろうか。」

「そだね」

「…瞬殺」

この子達本当に大丈夫なんでしょうか？

「雷装、瞬脚」

愛の魔法、脚に雷を纏い、人の能力を超える脚力を見せる技
愛の武器は短剣、脚が早いと果物ナイフでさえ凶器に等しい、

対する敵はなんとか愛の乱舞を止めている。結構強いのだろう。

「ハハツ、やっぱ君は止めてくれるね？」

「当たり前だ、これくらい」

「そつ？じやあ久々に本氣でやるね～？」

「雷装、瞬腕」

愛の攻撃回数は1秒3発、それを永遠と防ぎきるのは無理がある。腕に雷を纏つて1分と経たないうちに勝負は付いていた。

「闇影、幻夜の誘い」

明の攻撃が相手に当たった瞬間、相手は錯乱して倒れた。多分闇系統の幻覚魔法、まあその幻覚は血がぐつちょぐつちょ出で、自分の顔にかかり、

目の前に死んだ人達が…みたいな奴だろう。喰らいたくは無い！

「水帝、睡蓮」

裕香の魔法はちょっと激しい。なにが激しいかと言つと技が大きい、今の技だつて校庭地形変えちゃつたし…

「あれ？もう終わり？あつけないな？」

裕香さんっ！貴方がこれやつたんですよ！？

「ハツハツハツ流石、だね？」
「来到了。ルアーデ、

「さあ乖離！俺と勝負だ！」

「うん、早く終わりにしたい。」

俺は目を閉じて鬪気を纏い、突撃した。

「流石つ、早いね？炎ノ盾！」

ルアーデは炎で出来た壁を作る。素手なら重症だ。素手なら、「ディスペル、」

俺は突き出す右手にディスペルを纏い、殴る。

それだけの行為で炎の盾は消える。

「くつ！灼熱業龍！」

「土刀、纏い」

「土刀、堅閃」

刀が土に覆われていく、ただの土ではないが、平たくなった刀は炎の龍を全て防ぎきる。

「昨日よりは強かつたよ？じゃあ終わり」

「土刀、地壕降下」

刀を地面に叩きつける。そこから地面が割れ、そこにルアー＝デは落ちる。

本当は体にこの一撃を当てるのだが…流石に死ぬだろう。

「ルアー＝デ、残念でした。」

俺は人事のように言って3人の元に帰る。

「ただいま戻りました。」

「お帰り！ツチ何で負けないんだよ！」

「…おめでとうそして残念。」

「お帰りなさい。」

まともに返事をくれたのは裕香さんだけでした！

「はい、今回のクラス対抗戦はチーム祈りで決定ね？」

じゃあ4人共、先輩達にも負けないようがんばってね？

「え？学年対抗戦じゃないんですか？」

俺は問う、

「あれ？ いつてませんでしたって？学校全体ですよ？」

俺の正体ばれるかも、、、。

ちょっと心配になりながらも無事模擬戦終了、次は対抗戦、

「どうなるんだろうな？」

俺の独り言は周りの喧騒によつて搔き消された。

第4話 模擬戦（後書き）

模擬戦です。次は対抗戦にしようかと思います。
明日は投稿できるか分かりませんががんばってみます。
では5話でお会い出来ることを、丶、

第5話 対抗戦開始（前書き）

対抗戦です。本当にちょっと投稿できません。

第5話 対抗戦開始

今日の天気は快晴すがすがしい朝、そしてそれを見る俺の心は嵐、
「今日は対抗戦かあ、ばれないようにしないとなあ。」
虚空に向かつて今日の目標を言つ。

「さて、登校時間だ。」

俺は玄関を出て歩き出した。足取りは重い。

そして玄関の近くに人が立っていた。よく知つてゐる人物だった。

「裕香、どうしたんだ？ こんな所で、」

「え？ いやまたま通りかかっただけ…よ？」

「何故疑問系なんだ？」

「まあいいのよ。ちよづじ良かった。一緒に学校行きましょう。」

「ああ、いいぞ」

俺達は2人並んで歩き出した。

少し歩くともう学園だが彼女は聞いてきた。

「ねえ？ 今日はどうするの？」

「どうつて？」

「今日対抗戦にはお姉さんと弟君出るんでしょう？」

「ああ、そちらしにな？」

「調べたんだけどどうも貴方のお姉さんと弟君、同じチームよ？」

「つ…！？ それは本当か？」

俺は自分の体が強張るのを感じた。

なんせあの最強が2人同時で来るのだ。洒落じやない。

「間違いなく真実、特にお姉さんはやばいわよ？」
「…知つてる。まあそれでも戻りはしないさ、絶対に…！」
「…」めんなさい、暗い話になっちゃったね？」

それでお願いなんだけど……」「

「なんだ？言つてみ？」

「うん……もし今日優勝したら、私どデ、デー……トして、」

「？よく聞こえないもうちょいはつきり頼む。」「

「もういいわよ！馬鹿！」

「いつて、待てよおい！どうしたんだ？」

裕香は俺の大事な部分を蹴つて行つてしまつた。

「なんだつたんだ？」

俺はさっきの事を思い出しながら歩いていると誰かにぶつかつてしまつた。

見ると女の子のようだ。

「ごめんなさい、ちょっとと考え事を、」

俺は謝り、女性に手を貸す。

「いえ、いいんですよ。」

女性が顔を上げる。

俺はその顔を見た途端硬直した、その女性は柊夏目……俺の元姉ちゃんだった。

女性も感ずいたようで、

「乖離……なの？ねえ…そつなの？」

「人違いですっ！」

俺は気付くと走り出していた。

後ろから呼び止められる声が聞こえたが気にしない事にした。

教室へ入つた後も俺は落ち着いていられなかつた。

そわそわしてるとチームの3人が来て、

「乖離つちく、どしたの？顔色悪いよ？」「

愛が聞いてくる。他の2人も心配してるようだ。

「姉ちゃんと会つた。」「

「姉ちゃん？」「

「愛と明は知らないのね？ 乖離、この子達ならいいでしょ？」

俺は裕香の質問に無言で頷く。

「乖離、実は柊家の人間なの、」

「つー？ ねえ それって… 嘘だよね？」

「…本当に？」

2人も動搖している。

「ああ、本当だ。今は違うが血は繋がっている。」

「そうなんだ。」

「…なんとなく分かる」

2人の反応はこれだつた。

「でもなんで？ 乖離つち強いじやん！ なんで今は柊家じやないのー？」

「俺は魔法が放てない、使えない、魔力はあるのに…だ」

「…だから捨てられたの？」

「ああ、そうだ、それだけで10歳の頃捨てられた。
まあ今は未練なんて無いけどな？」

3人は暗く黙り込んでしまつた。

「おいおい、俺の事だ、気にするな。ほら対抗戦行くぞ？」

俺は3人を連れて対抗戦へと向かつていつた。

「お姉ちゃん！ 本当なの！ ? 兄ちゃん居たのー？」

「ええ、あれは多分乖離だつたはずよ？」

「良かったあー居るんだ！ ジャあ戻つてくるよね？」

弟、祐樹は興奮した様子で聞いてくる。

「…分からぬ。」

「え？」

私は分からなかつた。いつも私を見ると近寄ってきた乖離が

今日は顔を見た途端に逃げていつた。

「どうして？」

私はもう一度会つて家出した理由を聞こうと思つた。
なんで家出なんてしたのっ！乖離！

私は心で怒つていた。

10歳の誕生日に乖離が家を出てつたと父から聞かされた時は本氣
で怒つていた。

家出ではなくその父から追い出された乖離の事は知らずに…

対抗戦会場では真ん中をぐるつと囲む観客席、
控え室ではそれぞれのクラス代表の人達、

「はじめました！クラス対抗戦！チーム戦、
このゲームは各クラスの代表チームが1対1で争うゲームです。
詳しく述べは説明書をどうぞっ！」

説明書あるんかい！

チーム対抗戦説明～～

まずチームの代表者を決める。そして1対1で対戦する。
図で表すと…

裕香	VS	敵キャラA	×
明	VS	敵キャラB	×
愛	VS	敵キャラC	×
代表者	乖離	VS 敵代表者	×

は勝ち、×は負けとなると4対0で左が勝ちとなる。

だがどれだけ代表者以外が勝つても代表者が負ければその時点で代
表者が負けたチームの負けとなる。

まあ代表者が全てを決めるゲームと言つていい、

なら前の3人必要なくね？とお考えの方！見逃してください！

戦闘する人数は少ない方に多い方が合わせるようになつている。
例、5対4＝4対4、こんな感じだ。だからずつと試合に出る者も

いれば出ない者もいると言つたらしく、お分かりいただけましたでしょうか？

作者説明へタですので分からなかつた人は御許しを、、、

「で、代表者は誰にするんだ？」

「え？ 乖離つちでしょ？」

「…当たり前」

「私もそれでいいと思うわ」

「この人達は…！」

「本当にいいのか？ 僕が負けたら負けだぞ？」

「…いいよ」

「わーそろつたーすぐーいって違う！」

「もういいよ！ 僕で、負けても文句無しだぞ？」

「大丈夫でしょ？ だつて乖離つちのマジまだ見たことないし」

「そうよね？ 乖離」

「…分かってる」

「ばればれかよ、ハアまあいいや」

こつして代表者は俺になつた。いよいよ1回戦だが

「さあ注目の1回戦です！ 対戦チームは1-Sクラス対2-Aクラスだ！」

最初から1-Sは2年生と当たつてしまつたが大丈夫か！？

しかも1-Sの代表者は最近編入してきた子だ。この試合どうなるんでしょう？

そして始まつた対抗戦、順番は裕香、愛、明、俺と言つ順番だ。

なお乖離以外の3人は戦闘実況はたまにありますがあとんどありません。

「ごめんなさい！」と言つことで結果だけ、、、

「いいこと教えてやる。俺は系統雷の使い手だ。このナイフ一本でお前の首搔つ切ることが出来る。」

男は脅しのように声を挙げ、ナイフを取り出す。

「試して見ればいいじゃないですか先輩？たかがナイフじゃ俺は殺せませんよ？」

俺は更に挑発して動きを見る。

「死ね！」

男は一言言つと視線から消えた。

そして左から迫るナイフを素手で受け止め、

「ほら先輩、遅いですよ？」

両手でへし折った。

そして男の腹に蹴りを入れる。

「があ」

男がうめき声を上げる。

「じゃあ先輩の真似を…いいこと教えてやる。貴方は自分が雷系統を使う、と言つたが、

そのくらい俺だって使える」

「雷刀、纏い、」

「雷刀、激雷」

刀に雷が帯びる。そして刀の先から雷のみの刀が伸びる。その先で男の体を切つた、いや、当てた。結果、男は感電して気絶、

その後しばし無言の間が訪れた。

少し経ち、所々から歎声が聞こえてきた。

「すごいです！1-Sの代表者は2-Aの代表者を軽く倒した！これはダースホークでしょうか！今後共期待したいです！」

俺は皆の下に戻ると、

「乖離っちは雷も使えたの？」

「…規格外」

「 もう驚かなくなってきたかも」
「 酷いなあ勝つたのに。」

またもや非難？された。この試合を見てた姉弟がいたのだが・・・
「 姉ちゃん、あれ兄ちゃんだよね？」
「 まず間違いないわ。あんなに強くなつて」
「 じゃあその内当たるかな？」
「 どうでしょうね？」

姉は笑う。弟はそれを不思議そうに見てゐる。
「 はやく来なさい。乖離」

姉の発した言葉はこの場にいる弟しか聞こえていなかつた。

第5話 対抗戦開始（後書き）

結構疲れました。

評価してくださる方々ありがとうございます！

これからもがんばります！

では6話でお会い出来るのを、

第6話 対抗戦、姉戦（前書き）

「んにちは！大事な事が終わりました。

これからはばんばん書いていきたいと思います！

第6話、どうぞ！

第6話 対抗戦、姉戦

その後俺達は何回か勝ち進み、遂に2・Sクラスと戦う事になった。
2・Sと言えば柊家の二人が居るクラスで有名らしい。
なんでも柊家に勝てるのは生徒会長くらいだとか…その生徒会長も
ヤバイらしいが…

「さあなんと1・SクラスVS2・Sクラスの対決です！」

1・Sには代表を入れて4人の強者達！そして2・Sにはあの有名
な柊姉弟が居ます！

おや？1・Sクラスの代表者もよく見れば柊、ですね？これは何か
あるんでしょうか？

それでは、準決勝、開始です！

司会者の合図で試合が開始される。
しかしあの司会者…くるか？

「ごめんなさい、ちょっとといい？」

いきなり女子に話しかけられた。

「私達チーム2人なの、だから代表とあと1人でチーム組んでね？」
紛れも無い…姉だ。

「だつてさ、」

「…2人なのに他のチームより強い、」

「誰が行くんだ？」

「私が行く！」

言つたのは裕香だった。

「まあいいんじゃないの？」

「…賛成」

案外早く決まった、試合は俺と裕香で出るらしい。

「そちらのチームは決まった？」

夏目が聞いてくる。

「はい、決まりました。」

「楽しみね？ 乖離、」

「…ナンノコトヤラサツパリデス。」

「まあいいわ。久しぶりに本気だせそつだし。」

夏目が笑っている。正直怖い、美人なのだか、、、、

「さあ、最初の試合の方は前へ、」

「お姉さん、よろしくお願ひします。」

祐樹が裕香にお辞儀をしていた。

「いらっしゃるそ」

裕香は表情を変えずに同じ事をした。

「両者、試合開始！」

戦闘が始まった。

「お姉さん、ごめんなさい。僕、そこには居るお兄さんに聞きたいことがあるの、

だから早く倒すね？」

「どうぞ、」

「風翔、天馬」

祐樹が短い詠唱を終えると風が集まりあつと言ひ間に翼が生えた馬になつた。

「水帝、睡蓮」

裕香も膨大な水の渦が出来て行く。

その2つが当たり両方の魔法が散つた。

「すごいや！ お姉さん！ 今の本気だったのにー。」

「ありがとね？」

「うん！ じゃあ次ね？」

「え？」

裕香が言い終える前に詠唱を始める祐樹、

「闇風、闇風馬」

今度の魔法はちよつと違つ。

あの風は多分、闇と風の魔法を混ぜた魔法、祐樹に出来るところには、

「姉ちゃんにも出来るのか…」

俺は深くため息をついて試合を見守っていた。

「闇と風つなによ！」

裕香はド突きながら後ろへ跳躍する。

「水帝、蓮華電花」

裕香の魔法で一つ一つがとても大きい花が数十個と咲き誇る。

そしてその花は祐樹の魔法に触れた瞬間、何本もの槍となつて貴いた。

別の花が当たる。今度は刀、次は針、

そして最後に大きな剣となり祐樹の魔法を切り裂いた。

「ハアハア、今のはきついなあ」

裕香が疲れた顔で祐樹を見る。

「お姉さん、本当にすごいや！」

「でもこれで終わりだよ？」

「闇風、八方烈風」

裕香の周りに黒い風が8つ出来る。

裕香に8つの風が迫つて来て、全てが当たる直前に止まった。

「僕の勝ち！」

祐樹は嬉しそうに笑う。

裕香もつられて笑い試合は祐樹の勝ちで終わった。

「いよいよね？ 乖離？」

「誰ですか？ ソレ？」

俺と姉ちゃんは言い合つてゐる。

「いいわよ、もう、乖離でも乖離じゃなくても、」

でも、と彼女は付け足す。

「乖離と仮定してお仕置きしなぐりやね」

「……」

「さあお仕置き、もとい代表戦の開始よ?」

「…はい」

「それでは、試合開始です!」

司会の声、それと同時に夏目が手を横に振る。手を振った瞬間、俺の立っている場所が凍つた。

「つー?」

「さあ乖離、私の氷は闇と水の氷だから簡単には壊せないよ?」「くつ!闘氣!」

俺は闘氣を纏い素早く横に逸れた。立っていた場所が氷で埋まる。

「まだまだよね? 乖離、凍!」

また手を振る。無詠唱もいいとこだ。

俺はまた飛び退き刀を抜いて斬りかかった。

「速いけど、甘いわよ?」

目の前に裕香の顔がある。そこには1mm程度の薄い氷、ただそれだけで刀を止められていた。

「くつ!火刀、纏い」

「火刀、薄火」

ぶつかったままの壁に叩き込む、氷で出来た壁が溶ける。

「うそつ!」

夏目はすぐに下がりまた氷を脚に付けようとした。

それを俺は

「火刀、薄火」

刀を下に突き刺す。

氷があつと言う間に蒸発する。

「…? 乖離、酷いなあ、じゃあ本気で」

「闇氷、天氷夜鯨」

俺の周りに分厚い氷が全方向から迫る。

「火刀、業火絢爛」

目の前の氷に一撃を叩き込む。
氷は斜めに溶けたがまだ一本、

「もう1発！」

俺は今度、逆から斬りこむ、×字になつた氷にとどめの横薙ぎ、
氷は溶けて目の前が見える。目の前には驚いている夏田、

「とどめ！」

俺は業火絢爛を纏い、爆発的に跳躍して夏田の目の前に迫る。

「つー闇氷、刺殺壁」

夏田の前に前には表面に棘がびっしり付いている壁、

「くそつーせああ

俺はその壁に割り込み刀を振る。身体中に棘の傷が付く。
そしてそんなのも気にせず俺は夏田の首に刀を添えていた。

「俺の勝ちですね？」

「…負けちゃった。お仕置きできなかつた…

「残念ですね？」

「…貴方、乖離なんでしょう？ねえ！」

「…じゃあ俺は行きますね。　またね姉ちゃん。」

俺は小さい声で夏田に言う。

「うん、またね？乖離」

夏田は泣きそうになりながらも笑つて言つた。

とうとう、ばれてしまった。でもいいと思つた。

まあこれで柊家に戻ると言えば否だが…

こうして姉戦は終わつた。次は決勝戦、相手は生徒会長、
「疲れたのになあ、… もうヤダ、」

第6話 対抗戦、姉戦（後書き）

次で対抗戦終わりにしようかと思います。
その次の登場人物の紹介書きたいと思います。
では第7話でお会い出来ることを、
、
、

第6・5話 生徒会長、（前書き）

「んにちは、
この話はまあ聞話と思つてください。
短いですが、、、

第6・5話 生徒会長、

「はあ今回も退屈ね、」

私は一人で試合を見ていた。

一応チームと言つことで通つていい。

たつた一人のチーム、私、高梨梨花だけのチーム、

何故一人なのか、私にも分からぬ、ただ二人いても、三人いても、

私一人でも、

いつも結果が同じだつた。それだけのことだ。

「夏目ちゃんとか祐樹君は結構樂しいけど他はなあ、」

今見てる試合はその祐樹君が出てる試合だから見ている、もうすぐ試合が始まる。

「へえ、祐樹君とやりあつてる子結構いいわねえ」

でもまだ弱い、もつと強い人はいないのか。

「祐樹君が勝つたわね？」

見ると8つの風が1年生の女の子に当たる直前で止まつている。

「立花裕香ちゃん、1-Sクラス、覚えとこ」

次は夏目の試合、これは結構樂しみだつた。相手は誰でもいい、ただ夏目の試合を観たかった。

夏目の相手は男の子、代表らしいけど弱そうだ、武器も刀一本のみ、

「これは夏目、圧勝かな？」

「夏目？何を話しているの？」

夏目はかすかに口を動かしているように見えた。

男子の顔はよく見えないが知り合いのようだ。

そして試合が開始された。

「え？」

私は驚いた。

夏目にじやない、夏目と戦つてゐる男の子、

「闘氣を纏えるのかあー中々やるのかな？」

私は少しこの試合が楽しみになつた。

少し経つと彼が夏目の前で刀を振つていた。

夏目も本気を出したようで魔法を詠唱し始めた。

彼の刀がその壁で止まっている。

「なんで彼、魔法使わないのかしら？」

私は疑問に思つた。

彼が何かをしゃべる。その瞬間、彼の刀に膨大な火の魔力が集うのを観た。

「つ！？」

私は驚いていた。彼女の薄い壁がいとも容易く破られたのだ。

私は急いで夏目を見た。夏目は詠唱して魔法を放つたところだ。あの魔法は確か、天氷夜鱗、と言う魔法だ。全方向から厚い氷が迫り潰される。

私も喰らつた事があつた。あれは傷を負いそうになつた。

「彼も終わりかな？」

私は中ば諦め状態で觀ていた。だが

分厚い氷に斜めの線が入つた。

「え？」

疑問を口にする。そして次の線、次の線、そして
彼女の魔法が突破された。

そして彼が地面に脚をつけた途端彼女の前に迫つていた。

“速い”！

私はそう思つた。だが夏目も負けずに刺々しい壁を作る。だが彼はその壁を切り裂き、夏目の首に刀をつけていた。

「夏目が負けた…？」

彼と夏目は話している。何を話しているかは分からぬが夏目がすごく嬉しそうにしているのは分かつた。

「つ！ そうだ、彼の名前！」

私は生徒会長パワーで彼の名前を調べた。

彼は柊永離、1-S チーム祈りに所属、

こう書いてあつた。

「そつか、」

私は知らず知らず笑っていた。

「もう一人、楽しませてくれる一家の一人が居たんだ。」

「あゝ次が楽しみ！」

私は笑いながら走り出した。

なんで走ったかはよく分からぬ。

でも興奮して走りたくなつた。

彼、彼と戦える！！

それだけで頭がいっぱいだつた。

「アハ、柊家はいつもたのしませてくれる。3人目を楽しいかな？」

彼女は走り続けた。この興奮がおさまるまで、

その頃彼は、

「ヴィクシユ！」

くしゃみをしていた。

「?なんか嫌な予感するな?」

その予感が後々当たる事を知らない彼が居た。

第6・5話 生徒会長、（後書き）

どうも、生徒会長の心境ですかね。
次回は乖離君と生徒会長戦います！
お楽しみに！
では今度こそ7話でお会いできることを、

第7話 亂闘の末に残るもの（前書き）

こんにちは今日3つ投稿しました。

つてあれ？もう昨日でした。

これ書いたら寝ます。

おやすみなさい

第7話 亂闘の末に残るもの

「決勝戦か？」

「なんでも俺一人なんだよ……」
今、俺が居るのは待合室、次の試合がある人は此処で待つている。

何故 僕一人かと言うとなんでも決勝の相手の生徒会長さんのチ一
ムが一人だからだそうだ。

一チームじゅねえじゅん

一人で愚痴るとむなしくなってぐる。

「アアアアアアアア」

「アサヒ」

全てが完璧の高梨梨花選手だあああーーー上

おお、なんか観客（主に男子）がすげえ騒いでる。

「続きまして！1-Sクラスのダースホーク、カツコいい、カツコいい、カツコいい！」

カツコいいの終乖離くんだあああ！！」

おかしいだろつ！－！－！

おかしいだろつ！！
大事なことなので2回言いました。

「君が終永離君？」

「アリド、」

話してきたのは生徒会長、

「貴方、夏目の中君でしょ？」

「…はい」

「やつぱり、でも本当に柊家つて美形ばかりだね？」

「先輩も綺麗ですよ？」

「…そう、私は…梨花ね。名前で呼びなさい。」

「はい！梨花先輩。俺のことはなんでもいいんで」

「そう、じゃあ乖離君、やろうつか？」

「…はい」

梨花はそう言つと右手の人差し指を此方へ向けてきた。

「BANG！」

「はい？」

梨花が言つと俺の目の前に突然爆発が起こつた。

俺は素早く闘氣を纏い、爆風を受ける。

「つ！」

皮膚が熱い、

「はつ！」

闘氣を放ち、周りの炎を消した。

「驚いた？私の魔法、爆発するから気をつけてね？あと系統は火と土だよ」

「爆発つて…」

「ほらほらもう一丁、BANG！」

目の前に広がる爆発の予兆、

「水刀、纏い」

「水刀、水舞欄」

水を纏つた刀で周りを一薙ぎ、爆発が収まつた所で梨花に斬りかかる。

梨花はあつけなく斬れた、いや、斬つたのは梨花じゃなかつた。

「それ、私の土人形よ？どう、上手でしょ？」

あと、と付け加える梨花、

「それも爆発するから」「なつ！」

「なつ！」

斬った後から光があふれてくる。そして俺は爆発に巻き込まれた。

「『ほっ！』『ほっ！』あ、無茶苦茶な！」

俺はなんとか生きていた。

「うわ、これで夏目も倒れたんだけどなあ？」

姉ちゃん、これで倒れてもおかしくないよ？

「ううやつてくれますね？」

「でしょ？」

彼女は言いながら指を指す。

俺は必死に避ける。

でも避けるだけじゃ拉致が開かない。

「水刀、水破天盧」

俺は水の高圧刀で距離をとり全て斬り捨てようとした……が

「それはやばい、土人形×16！」

目の前にさつきの人形が16体現れる。それらがすべて一箇所に集まり俺の刀を食い込ませて止めた。

爆発に構えて鬪氣を全開にして土人形に刀だけではなく手まで貫通させた。

「あ、それ、爆発しないよ？」

「つ！」

氣付くとその土人形は鉄のように固く固まっていた。

「くそつ！」

急いで抜こうとするが手まで貫通してたため抜けない、

「じゃあどどめ…かな？」

彼女が手を翳す。

「爆！」

そして俺の周りを激しい光が襲う。

「ディスペル！」

身体に対魔法用魔法を纏う。

本当は飛ばせたり出来るが俺は魔法を放てない。
そして視界が赤く染まつた。

俺はまだかすかに意識があつた。
力を振り絞り立つ。

「え？ 乖離君、まだ立つの？」

「ハアハアがはつ！」

口の中に血の鉄分が広がる。

「まだ…一撃当ててないです。」

「……」

「ですから俺の一時的本気を使います。」

「え？」

彼女は驚いた顔で此方を見る。

「まだ本気じやないの？」

「ええ、お見せします…」

「水刀、纏い」

「魔法刀、次の一撃で今ある魔力の3分の2を消費、
これが俺の奥義、見たいなもの、
自分の魔力の量を好きな量送り、量によつてはすさまじい威力とな
る。」

今は大分魔力がなくなつてゐるから3分の2でも大丈夫だらう。

「水刀、水下烈滅！」

「土人形×32！」

32体の土人形、それらを全てなぎ払う。

爆発する頃には次の人形へ移つてゐる。

「残り1体！」

後1体の土人形を斬り、居合いの体勢に入る。

「せあつ！」

掛け声とともに梨花の横を通りすぎる。だが…

最後の最後で狙いがずれて当たらなかつたような気がした。

「くそ、結局掠り傷一つ無し…か。」

俺は咳き、倒れる。そこからはもう真っ暗な世界だった。

結局、最後の彼の一撃は当たらなかつたようだ。
私は考えながら更衣室に入つた。

「あの時の一撃、絶対よけられなかつたなあ。」

あの時は彼が倒れる前の一撃の事だ。

「速くて見えなかつた…」

咳き、着替えるために、上着を脱ぐと左の横腹が痛かつた。

「え？」

確認してみると横腹から血が出ていた。服を見るとさつく切れていった。

「やっぱ彼の事、好きになるかも。」

私は笑いながら医務室まで向かつ。

多分この傷を見せたら驚かれるだろう。

「皆、どんな顔するんだろうなあ」
クスッと笑い梨花は走り出していく。
そして医務室の扉を思い切り開けた。

第7話 亂闘の末に残るもの（後書き）

次は登場人物紹介でもやります。
明日もがんばつて投稿したいです
では次でお会い出来ることを、丶、

第8話 生徒会、夜の柊家（前書き）

「こんにちは！」

第8話です。

評価が100を超えた！

評価してくださる方どうもです！

第8話 生徒会、夜の柊家

クラス対抗戦が終わって1週間が経った。

現在此処はクラス、

「おいつす！ 乖離、」

「よお、成一、」

コイツの名前は田中成一たなかせいいち

つい最近同じクラスで話していたらいつの間にか友達と呼べる存在になっていた。

いい奴なんだが…

「なあなあ？ 生徒会長ってかわいくね！？」

あ～でも～お前のチームの皆も捨てがたいしなあ？

までよ～くそつ！ 先生を忘れてたつ！！

俺は誰がいいかなんて選べない！

乖離！ お前は誰を選ぶ！

うん、まあ極度の女好き、顔は短髪で逆立てて整っているんだけどね…

彼女とかはたまに出来るらしいよ…

でも出来た途端にナンパしに行くつて… フラレルヨナ…

「聞いてるのかよお乖離い～無視するなよお～オイ～

「あ～うん、誰でもいいよ～お前は誰がいいんだ～」

とつあえず流す。

「つー～俺は選べない！

こんな可愛い女の子たちの中から選ぶなんて！

無理だああああああああああ…！」

「はあ、いい奴なんだけどなあ」

周りの女子が離れていく。

そこで校内放送が入った。

「ピンポンパンポン、迷子のお知らせをします。

なんか髪の毛が黒くて、最近編入してきた、柊乖離君、柊乖離君、至急生徒会室まで来てください。生徒会長さんが恋しいと言つております。

繰り返し、つて「冗談だよ？ねえ先生やめつ——ツ——————

——ガチャリ！」

……ハイ？

「失礼しました。柊乖離君とそのチームの方は至急生徒会室へ起しきださい。」

梨花先輩……ドンマイです。

俺は心の中で合掌、そして生徒会室へ向かった。

俺は今、生徒会室の扉の前にいる。

裕香とか来ると思つたんだが…もう来てるのか？

「ハア仕方がない、一人で入るか。」

「失礼しま——」

「あつーお兄ちゃん！お姉ちゃん！お兄ちゃん來たよー！？」

——した。」

俺は扉を閉めた。

裕香達の姿は見れたが俺の前に2人会いたくない人物が…

「お兄ちゃん、なんで逃げるの？」

「よお……祐樹」

「ねえなんで逃げるの？」

「……」

「もひ…逃げないでね?」

「…せい」

俺は生徒会室に連行された。

「遅かつたね? 乖離君。」

「梨花先輩? なんですかの放送、」

「ん? アレ? 結構本気だったんだけど先生に止められひやつた… テ

ヘツ

「テヘツ… ジヤないでしょおおおおおおお…」

「会長、それより本題に…」

会長の後ろで立っている女の子がいた。

「あ、うん、あこの子は奈央ちゃんね?」

「どうも、3-S 小椋奈央です。」

「どうも…」

後ろの女子はゆっくりと頭を下げる。おれも釣られてお辞儀をする。

「それで、本題なんだけどね? 乖離君。」

「はい」

「実は1年生生徒会メンバーになつてほしいの一…」

「…え?」

「だから1年生生徒会メンバーになつてほしいの一…」

「いや、だからなんで俺が?」

「強いから、カッコいいから、あと貴方が他の女の子とイチャコワしないように監禁

もとい見張らなければいけないので、」

「今サラッと危ない単語聞こえましたが…?」

「ちなみに裕香さんや愛さんや明さんには断りをいれましたので…

ぶつちやけ貴方に拒否権はありません。」

会長の後ろの奈央さんが…。「俺の人権はいづこへ…？」
「と言うことで乖離君の生徒会メンバー就任に拍手…」
ワーパチパチ
つて違うよお！

「まあいいんですけど…」

「お兄ちゃん？」

「…何だい？ 祐樹？」

「聞きたい事があるの。」

お姉さんまで加わりました！

「なんで10歳の誕生日の日に家を出て行つたの？」

姉と弟が交互に聞いてくる。

「…家を出たわけじゃない。」

「え？ ジャあなんで」

「父親に追い出されただけだ…。」

「つ！」

「え？」

「それ本当なの？」

「…ああ」

「そつか、父様、嘘ついてたんだ、」

「ねえお姉ちゃん？」

弟が笑いながら、

「今日、父様殺すの手伝つてください。」

「うん、祐樹、わたしもそれ言おうと思つたんだあ、殺つちやおう
か」

危ない！」の子達は危ない！

「待て待て、お前ら殺すなよ？ いいな！ 殺すな？」

「…分かりました、お兄ちゃんがそんなに言つなら…」

「…やらせてくれたよつだ。

「…半殺しで許します…。」

諦めてねえええええ！

「祐樹？ちよつと落ち着かないか…？」

「お姉ちゃん？僕の家の地下つて確か倉庫に似せた拷問部屋つて聞いたことがあります。

本当ですか？」「

「ええ、本当よ？祐樹、どうある？お父さん殺しちゃいなこらし
いから

半分よりちょっとキツメに殺つちゃおうね…？」

「はー、お姉ちゃん、僕、お母さんと話します。」

もうこいや、俺こは止められない！

元父よ、儂くも永遠に…散つてくれ…！」

「乖離君～？きこてる？」

俺が元父にさよならを言つてこたら会長に話しかけられた。

「なんですか？梨花先輩、」

「あのね？生徒会に入るにあたつて、ギルドランクC以上が求められるんだ。」

「ギルドってあのギルドですか？」

「やつ、あのギルド」

どうやらギルドへ行つてランク以上にならなきゃいけないらしい

「あれ？でも裕香達はどうなんだ？」

「え？私はBだけど…」

「…同じ」

「私もB~~~~~乖離つむぎギルドすり登録してないの？」

「ああ

ギルドなんて行つたことがない…

「そう、じゃあ乖離君？ 2日間、学校休んでいいから、〇以上になつてきて？」

「はい？」

「聞こえなかつた？ リラック以上2日以内。」

「えつと休むとは・・・」

「奈央、乖離君2日間休みにしといて、」

「もう完了していきます。」

この人達本当の悪魔だ…

こうして俺は一人でギルドへ行く事になつた。

その日の夜、
場所は現在柊家、

「父様」

弟、祐樹が父に駆け寄る。

「どうした？ 祐樹？」

父様と呼ばれる人が笑いながら話す。

「聞きたい事があります〜」

「なんだい？」

「乖離兄様を何故追い出したんですか…？」

「つ…なんの事だい？ 祐樹、乖離は自分の意思で10歳のとき…」「言い訳はいいんですよ…聞いてるんですけど、何故つて？ 分かるでしょう？ ねえ父様、」

「だから知らんと…」

「…もういいですよ…。」

「お姉ちゃん、お母さん、地下に行きましょ。」

「貴方？ ちょっと私も聞きたい事があるの… ね？ だから
拷問部屋… もとい地下室、行きましょ？ そこでじつつつくり聞
きますから… ね？」

「ひー、夏田お前からも何か言ひてやつなやこー。」

父が叫ぶ。

「いやです。」

「なんだとい 親にその」

「自分に聞きなさいよ。お父さん? なんで連れられるか分かつてるくせに…

大人つて酷いんですね? まだ10歳の子供をお金も持たせず…ね?」

「いや…アレは。」

「アレは? と言ひ「とは本當でしたんですね?」

「だからそれは

父が口へりもる。

「ハア、言ひ訳はいいんだよ… それともなんですか? そんな戯言言つたら弟が帰つてくるとでも?」

乖離が帰つてくるとでも? まあ吐きまじょひ寝ないでくださいね? まあ今夜は寝かせませんけど」

その後、朝まで断末魔の叫びが聞こえたと言ひへ、

第8話 生徒会、夜の柊家（後書き）

感想・誤字脱字があつた場合は教えてさい！
では9話でお会い出来ることがあります、

第9話 ギルド（前書き）

こんにちはっ

第9話です。最近感想をいただきました。
ありがとうございます！
感想、待っています！

第9話 ギルド

朝8時、この頃はいつもなら学園で成一とかと駄弁つてているだろ？。でも今日は違う…会長のせいでギルドへ行くことになつた俺。まあギルドも行ってみたいと思っていたから嬉しいが…

「ここか？」

目の前には大きい建物、看板に斧と剣が交差してその中にギルドと書いてある。

中に入るととても広かつた。それ色々な人がいた。

筋肉隆々のごついおっさん、若い男達、女も結構居る。

あおれに綺麗な人やかわいい人がいるので後で成一を連れてつてみるか。

とかなんとか思いながら受付に行く。

「いらっしゃいませ、ギルドは初めてですか？」

「はい、まあ一応、ていうかなんで初めてつて分かったのですか？」

「ええ、まあ見たことない人でしたので…」

「へえ～、じゃあギルド登録お願いします。」

「はい、少々お待ちください」

「ではギルドの説明をさせていただきます。」

「はい」

「本来ギルドはモンスターの討伐や捕獲、などを主としております

が、中には護衛や、人物の保護、などもしております。

まあ護衛ですかは高ランクにならないと受けられません。」

「そしてランクの説明をさせていただきます。」

「お願いします」

そして長々と説明が始まる…

「本来ランクはG～SSSまであります。最低がG、最高がSSSです。」

まあ過去に一人、Zクラスといつクラスがありましたが…」

「なんでZなんですか？」

「それはZ（ぜってえ勝てねえよおー）の略です。」

「…そうですか。」

聞かなきゃ良かったかも…シラケタ…

「当然貴方はGクラスからです。」

他には…えっとGクラスでもSSSクラスの依頼は受けますが、ギルドは責任を取りかねますのでご注意を、「

「分かりました。」

「他に質問とかはありますか？」

「じゃあ、俺魔法使えないんですけど…大丈夫ですよね？」

「はい、えっと魔法が使えない方でも剣術に優れているとか武術に優れているだとかそういう特殊能力などがあれば大丈夫ですが…ありますか？」

「はい…一応刀術を覚えてます」

「なら多分大丈夫だと思います。」

「はい、」

「あとこれを、」

「なんですか？コレ、」

「貴方のギルド証です。そこでランクなどが書いてあります。」

「見ると俺の名前、ランク、歳が書いてあった。」

「ではいつてらっしゃいませ」

受付の人気が深々とお辞儀をする。なんとか登録出来た俺であった。

そして俺は早速依頼板を見てみることにした。

「これが依頼板か、」

依頼板には10個のボードが並んでいた。

一番左のボードにGと大きく書かれた板があつたので向かった。

「むう、あんまり楽しそうじゃない。」

そこに書いてあつた依頼は、（ペシトを捕まえて、）とか（話し相手になつて、）とか

「ギルドの依頼じゃないでしょお

俺は嘆息した。

そこで俺は目標であるCランクの依頼を見ることにした。

「お、いいなあコレ」

俺が目につけたのは黒熊王^{キングクリスティー}の討伐、または無力化だ。

俺がそれに手を伸ばして取る瞬間、手を捕まれた。

俺は手を掴んできた方を見る。

そこには俺より少し年下くらいの女の子がいた。

「その依頼はやめた方がいいと思うよ？」

可愛らしく笑い、と言うか元々可愛い、忠告をしてくれた。

「ありがとね？君何歳？ダメだぞ？こんな所に来ちゃ？早くお家に帰りなさい。」

「…私14歳なんだけど、一応貴方よりCランク高いと思つんだけど！」

「えつ！？14歳？ああ、なんだ14 - 4 = 10だよね？」

「めんどくさー！」

俺が言うと女の子の空気が変わる。

「いい加減にして欲しいかな？ていうかお兄さんいくつ？もしかして口リコン？」

「ロリコンは酷いなあ？」これでも15歳だよ？」

「ひー？15歳…ありえない。17、8かと思った。」

「うん、まあ言われ…た事ないよ?」「もういいよつ!それはやめた方がいいよ…」

「うーん君、ランクいくつ?」

「私?ランクは確かAだったと思つよ?」「…はい?」

「Aだつて!ホラ!」

女の子はギルド証を見せてくる。
そこには三円柚子、14歳、ランクAと書かれていた。

「つ!」

俺は驚く。

「ほらね? Aでしょ?」

「嘘だ、本当に…」

「本当よー見かけで判断しないで!」

「だつて本当に…14歳だつたなんてつ…」

「そこ!?」

俺はずつと気になつていたギルド証の歳の部分が14歳であることに驚愕した。

「そこじゃないでしょ! ?ほらつAランク!」

「あつ、本当だ、すごいすげー」

「馬鹿にしてるのかな?私、2系統使えるんだけど?」

「へえ何と何?」

「水と風」

「すごいねえ?」

俺は女の子の頭を撫でてやる。

「…やめろ~」

顔を赤くしながらぶつかってきた。

「あつ!」

女の子は躊躇いながらこちらになる。

「つと、大丈夫?」

俺は即座に反応して女の子を支える。

「…ありがとうございます。でも貴方がもし本当にその依頼に行くのなら私もいく！」

「まあいいけど…なんでこの依頼が危険なんだ？」

「それは…嫌な予感がするの。まあ信じてくれないでしょ」
「いいよ、一緒に行つてくれるのなら嬉しい。」

「本当に…？」

「ああ、俺はかまわないけど」

「そう、でも私可愛いから襲われちゃうかもしれないし…」

「ああ、大丈夫、俺お前みたいな子供を襲うような変態じゃないか

ら。」

「なんか傷つくよ…」

「まあ気にするな。」

「俺が慰めてやる。俺いい奴だわあ

「ところでアンタ何系統使えるの？」

「俺？ 俺は魔法使えないよ？」

「え？ 嘘、」

「嘘じゃないよ？ でも少し刀術習っているから

「…そう、見込み違いだったかなあ？」

「女の子はなにやら眩いていたが…」

「じゃあ行こうね？」

「ああ、」

「なんて呼べばいい？」

「女の子が聞いてくる。

「何でもいいよ？」

「そ、じゃあ行こう、お兄ちゃん！」

「つーやめてくれないか、その呼ばれ方はきつい」

「主に弟の祐樹のせいで…・・・

「やだ お兄ちゃん！」

「くそ、お前はなんて呼べばいい？」

「私は三月柚子、さつきギルド証見たでしょ？」

「そつか、じやあよろしく、柚子？」
「うん、よろしくね？お兄ちゃんー。」
キャラ違え～

俺と柚子は2人で依頼して玄関で止まつて いる。

受付の人が柚子を見た途端すこく丁寧になつたが

そして今俺と柚子は玄関で止まっている。いや止められている。

原因は相手で何故かと言ふと

「我々、柚子ちゃん親衛隊ー！」

こんな奴らが居た

「柚子？誰だ？」

うん、なんか勝手に出来た私を守るみたいになケルーフ、
正直ウザイんだよね。どうにかしてよお兄ちゃん

「柚子様にお兄ちゃん！羨ましい！」

俺にどういふ？」

「道徳の実現」

無茶を言ひな

「さあ、きから貴様、柚子様になにを！」

柚子ちゃん親衛隊に一人が剣を抜いて向かってきた。

俺は軽く流し、男の背中に蹴りを入れた。

一
かは
つ
！」

男は壁に突撃して動かなくなる。

会員ナンバー 145が

卷之三

息ひつたゞ、魔去も同持、

「鬪氣」

俺は鬪気を纏つて男達の前に走る、

と言つても男たちには俺がいきなり田の前に現れた、と思つだらうが……

「街中で、魔法を使っちゃあいけないよ。」

俺は2人の腹に1発ずつ殴る。

鬪気を使つたからしばらくは動けないだらう。

「終わつたよ？柚子、」

俺は同行者の方を見る……と口を開き固まつていた。

「お兄ちゃん、何者？」

「じゃない高校生……だけど？」

俺は笑いながら言つづつ歩き出した。

第9話 ギルド（後書き）

ギルド入りました。
妹系、つて僕の小説に入つてなかつたことこ気付きました／テヘッ
では第10話でお会い出来ることを、、、

第10話 モンスター（前書き）

10話目突破しました！

やつと… 10話！嬉しいです！

第10話 モンスター

そして現在、キンググリズリー黒熊王が生息している森へ来ていた。

来る途中何度も柚子に、アンタ、何者?と聞かれていた。いや、「アンタ、何者?」

現在進行形で聞かれている。

「だから言つたろ? しがない高校生」

「それはいい、もう聞いたよ? お兄ちゃん、」

「ぐつ!」

俺は返す言葉が無くなる。

「グオオオオオオオ! ! ! !」

そこに聞こえてきた声、

その声はまさしく黒熊王にふさわしかった。

「お兄ちゃん! 行こう!」

「ああ、」

俺達は声のあつた方向へ走り出した。

声の聞こえていた所に来ると周りの木がなぎ倒されていた。

「なんだ? 此処は、」

「黒熊王がやつたのよ。今回のは大きい、」

「グオオオオオオ! ! ! !」

声とともに現れた体はとても大きかった。

体長5メートルはあるだろう。片目には縦に線が入っている。恐ろしく獰猛な姿だった。

「お兄ちゃん! コレは私が倒すから見てて!」

「お前! 一人で大丈夫なのか? 柚子!」

「大丈夫! 伊達にAランクじゃないよ!」

言つと柚子は黒熊王に向かつて走つていった。

「可愛い熊ちゃん、私の後ろに弱いお兄さんがいるけど、
気にしないでね？」

柚子は言った。オイ！弱いって何だよ。

「水の力にひれ伏せ！渦潮！」

名前の通りに渦を巻いた水が熊に直撃した。

「グオア！」

熊はそれを諸共せずに柚子に爪を振りかぶる。

「つ！やつぱり効かないかな？」

柚子は軽く爪を避けて咳く。

「風水、風と水混ざりて全てを破壊する嵐となれ！烈風水！」

柚子の放った風と水が1本の回転する槍となつて熊を貫く。

「グオウア、」

熊は胸を貫かれて倒れた。

「どう？見た？私の実力、」

「ああ、すごい、俺なんて足元にも及ばないよ。」

俺はとりあえず褒める。

「えへへ、」

柚子は笑っている。俺達は依頼が終わり、熊の素材を取り、帰ろうとした。

が、

「グルアアアアア」

またなにやらすぐ後ろから声が聞こえる。

俺と柚子はそろつて振り返った。

そこには手と足が短く、大きい顎、一枚一枚が鉄のように黒光る鱗、長い尻尾、

それはワニのような姿をしていた。

「つ！」

柚子が驚いた様子でワニを見る。

「どうしたんだ？」

「アレ、Sランクのモンスター、巨鰐だよ。
こんな所に居るはず無いのに！なんでつ
。ん…話から察するにやばい奴決定、

「くそつ！烈風水！」

柚子が熊に使つた魔法を使つ。

だが魔法はゲイターの鱗に当たり四散した。

「なつ！？ありえない。」

柚子は自分の魔法を弾かれて呆然としていた。
ゲイターは長い尻尾を柚子に向けて放つた。

「危ない！」

俺は鬪氣を纏つて、ゲイターの尻尾を受け止める。

「ギツ！」

とてつもない衝撃が手から全体に伝わる。

「お兄ちゃん！何してるの！」

私の魔法効かないのにお兄ちゃんの魔法が効くわけがないよ！

柚子が泣きそうになりながら怒鳴る。

「言つたら？俺は魔法使えないんだよ。」

「だつたら尚更！」

「いいから見てろ、俺の戦い方をなつ！」

俺はゲイターの尻尾を放し、刀を抜いた。

「土刀、纏い」

「土刀、地壌降下」

刀をゲイターの背中に思い切り刺す。そしてそこから土の力で背中
を切り裂く、

はずだった。

「嘘だろ？」

俺の鉄を碎く魔法がまったく通つていなかつた。

そこにゲイターの大きな口が迫る。

「土刀、堅閃」

俺はすぐに体勢を取り直し、ゲイターの口に刀を見舞つた。

「グルッ？」

ゲイターの歯に当たり止つた。ゲイターの歯は1本折れただけ、「マジ？」

咳きながら後ろに下がり、

「うん、属性がいけないんだよ！ そうに決まっている！」

自分で納得して、

「雷刀、纏い」

「雷刀、激雷」

今度は頭に雷を纏つた刀で叩き付ける。

バチッと効果音がして頭からちょっと血が出た。だが致命傷には程遠い掠り傷みたいなものだ。

そこにゲイターの尻尾が横腹を直撃する。

「ぐつ！」

俺は尻尾と同じ方向に流れで衝撃を殺したが服がびりびりに破けていた。

「制服のほうが防御力あんじやねえの？」

そんな疑問を思う。

そろそろ決めなければまずい、

「雷刀、葬雷撃一手」

脚を強く踏み込みゲイターの後ろに廻つて尻尾に一撃を叩き込んだ。

「グルアアア」

今の一撃で尻尾の半分が切れる。

そのまま頭の方に回りこみ、一薙ぎ、二薙ぎ、ゲイターの顔に二つの線が出来ている。

「とどめだ！」

刀を垂直にゲイターの頭へと突き立てる。

当たった瞬間、火花が散り刀を拒んだがすぐに刀は頭にめり込みはじめて

最後には地面まで突き刺さつた。

「グルウウウウ……」

ゲイターの声も弱々しくなつていき、途絶えた。

「勝つた…」

俺は刀を放し、大きく呼吸した。

刀を放すと纏つていた雷の光がフツと消えた。

「お兄ちゃん？ 倒したの…？」

後ろからおずおずと柚子が出てくる。

「ああ、なんとか…な、いって！」

ゲイターに当たられた尻尾の部分が青く変色していた。

「お兄ちゃん！ 水の加護を、回復

柚子は右手を俺の横腹に当てて何かを唱えた。と思うと傷がみるみる回復していった。

「ありがとな？」

「いいよ、別に

「なんだ？ 泣きそうになつて？」

柚子は目に涙を溜めていた。

「だつてえ、お兄ちゃんが、ひっく、うつ居なくなるかと思つて、
つく

怖かつたよ~~~~~

柚子はそう言いつと俺に飛び込んできた。

俺は笑いながら息を吐いて、

「やつぱり子供…か。」

「子供じゃないし？ ていうかお兄ちゃん何者？

…アレ？

「柚子？ 口調が…」

「もう泣いてないし、」

「…・さいですか。」

「で、お兄ちゃん何系統使えるの？」

「…8系統、」

「はち？」

「うん

「ありえない」

「うん、言われ慣れてる。」

「…でもお兄ちゃんならありえそ'。」

「そつか…」

俺は少し笑う。

「でさ、お兄ちゃん、このゲイターどうすんの?」

「刀抜けないんだよね~?」

深く刺さった刀は地面からは抜けたが肝心のゲイターから抜けない。

「どうするの? お兄ちゃん?」

「う~ん仕方が無い、このまま持つて帰るか。」

俺は鬪氣を纏つて半分引きずるように刀ごとゲイターを担いだ。

「…お兄ちゃんつてさ、何でもアリなんだね。」

「やつかな?」

「うん、でもそんなお兄ちゃん、好きだよ!」

柚子は笑いながら俺の前を走り出した。
俺も後を追つて走り出した。

第10話 モンスター（後書き）

ギルドが終わつたら何をすれば……？
考へないといけません！

では第11話でお会い出来るることを、
、
、

第11話 死闘の末の後始末（前書き）

「んにちは！」

今日やつと活動報告の仕方を覚えました！

時間がある方はつまらないと思いますがみてください！

第11話 死闘の末の後始末

かれこれ巨鰐^{ゲイター}を引きずつて何時間経つだろ？

「やつと着いたか。結構疲れたな。」

俺は息を吐きながら足を止める。

「しようがないよ、お兄ちゃん、でももう門の前だよ？」

「ああ、じゃあ行くか。」

俺達はルソス王国の門に入る。

「そこの一人！止まれ、」

話しかけて来たのは門番、

「なんですか？」

「そのモンスターはどうしたんだ？」

「コレですか？殺して刀が抜けないので…引きずつて来たんですけど、なにか？」

「…お前、名前は？」

「柊乖離15歳です。一応王立魔法学園の1-Sクラスです。」

「…柊？まあいい。ギルド証を提示しろ。」

「どうぞ」

俺達二人は揃つてギルド証を見せて、

「よし、通れ。」

通してくれた。

「ありがとうございます。」

「ちょっと待て、そのモンスターの名前は？」

「えっと、巨鰐^{ゲイター}です。」

「そうか、ゲイター、って…え？」

「では失礼、」

俺達は全速力で走つて逃げた。
急いでギルドの前まで来た。

「ハアハア、お兄ちゃん、魔法学園の生徒だったの？」

「そうだよ?」

「…私、来年そこに入るんだけど?」

「そう、で?」

「私その学園の中等部の3・Sクラスなんだけど?」

「そう、で?」

「…たまには遊びに来てつて事、」

「?いいのかな?行つても、」

「いいと思うよ?まあお兄ちゃんが口リ「コンツ」て思われるだけだし、

「やだな!それ、」

「嘘嘘ホント、ダイジョブだよ?」

「どつち!?まあ暇なら行くよ。」

「うん!じゃあギルド行こい!」

俺達はギルドの扉を勢いよく開けた。

「あの~、乖離さん?その扱いでいるものは…?」

「えつと黒熊王^{キンググリズリー}を倒した後に、襲われちゃつて?」

「違います!その魔物の名前です!分かるでしょ?」

「え?受付さん知らないんですか!?」

「知つてますよ!巨鰐^{ゲイタ}Sランククラスの化け物、

その皮膚は並の武器や魔法をまったく通さない、そうですよね?」

「いや、俺名前しか知りませんでしたし…」

「…ハア、もういいです。で、なんで扱いでるんですか?皆怖がつてます。」

見ると俺達の周りには人がまったく居なかつた…

「えつと、なんでつて刀を頭に刺したら抜けなくなっちゃって…」

「はい…?その刀で刺した?」

「はい、グサツと」

「その刀は伝説級^{レジェンドクラス}の名刀ですか…?」

「いえ、師匠から貰つた練習用刀です、」

「どうやって練習用で刺したんですか、」

「このへ、グサツと…？」

「ちょっと待つてください、マスター呼んできます。受付の人は言い放ち奥に引っ込んでいつてしまつた。」

「俺なんか悪いことしたかな？」

「お兄ちゃん… 全てに置いて鈍感なんだね…？」

「なんですと…？」

俺ってチョー敏感だぜ？

しばらく経ち、2人の人影が奥から出てきた。

「この子？Sランク級倒したつての？」

「はい、マスター」

そこに居たのはさつきの受付さんとおばあさん、

「坊や？名前は」

「柊乖離です。」

「坊や、柊家の元長男かな？」

「…何故それを知ってるんですか？」

「年寄りを舐めるんじゃないよ？」

「何故に年寄り？」

「気にするな、で倒したのかい？ゲイターを」

「はい、襲われたんで」

「その刀で倒したのかい？」

おばあさんは刺さっている刀を見る。

「はい、これで、」

「嘘はついてないけどまだ隠してる顔…さね？」

「…エスパーですか？」

「年寄りを舐めるんじゃないよ。」

「確かに隠してます。」

「そうか、私はこのギルドのマスターさね、名前は…マスターさね。ようしく頼むよ。」

「名前がマスターですか？」

俺は疑問に思い聞いてみる。

「名前は違う。でもマスターとでも呼んでくれ。」

マスターは答える。

「その刀を刺した時に使った技を使えば抜けるんじゃないかい？」

マスターが笑いながら言つ。

「それはその技を此処で見せろ……と？」

俺は自分が思ったことを問う。

「そうさね？ 倒したなら見せてくれよ。倒した技を、」

「・・・・はい」

俺は諦め、柚子に下がつて『ひづて』言つて。

「見てください。」

「いいよ、」

「雷刀、纏い、」

「雷刀、激雷」

俺は歯を折つた時の技をゲイターから抜くように放つ。

だがゲイターと刀はびくともせずただ俺が引っ張つて『ひづて』いるだけだった。

だが周りの柚子以外は息を呑んでいた。

勿論、マスターも

「やっぱ倒した技じゃないと抜けないとかな？」

俺は周りを気にせず続けた。

「雷刀、葬雷撃一手」

倒した時の技を使う。

さつきよりも強い雷が纏われて、刀が抜けた。

「あ、抜けた。良かつたあ」

「良かつたですね？ お兄ちゃん！」

俺達2人は笑いあう。

「お主、なんだその力と膨大な魔法は…」

「これは魔法じゃありません、俺は魔法が使えない。」

「じゃあ何をした。」

「纏つたんですよ。雷を」

俺は間髪入れずに返答した。

「まあよい、じゃあ坊やは本当に倒したんだね?」「はい」

「なら坊や、坊やはGランクからAランクに変更、さね?」「ちょうどGランク以上にならなきゃいけなかつたんで…」

「そうかい。じゃあ報酬だ。着いてきなさい」

俺と柚子はマスターの後についていった。

「報酬はSランク討伐料、依頼料、巨鰐^{ゲイタ}の素材、

占めて1000万テラTさね?」

「そんなに!?」

「いいんですかっ!?」

俺達は交互に言つ。

「別にいいさね、どうせ坊やにはお世話になるんだ。」

マスターは言うと2人に500万Tずつその場で出してきた。

「よくこんなに早く…」

「これは私の金さね。別に後で取り立てればいいさね。」

「マスター恐るべし!」

「五月蠅いよ、さつさと行くさね?あと坊やには明日も来てもらひうさね。」

「…はい」

「お兄ちゃんが来るなら私もいく~」

俺達はマスターの部屋を出た。

そして戻ると、一人の女が俺の前に出てきた。後ろには一人の男、

「貴方、Aランクになつたんでしょう?」

「まあ成り行きで…?」

「そう、じゃあ私の奴隸になりなさい!」

「…はい？あの～奴隸の使用は禁止されていぬはずですが？」

「じゃあ部下、」

「嫌です。」

「そいつか…じゃ あ私と決闘しろ、お前が負けたらお前は私の奴隸：もとい部下だ！」

「あの～勝手に話を進めないで貰えます？」

「よし準備しろ…今すぐだ。」

女は言つて、俺を手招きしてきた。

「なんなんだよ、もひ」

周りからざわめきが聞こえる。

「おい！姫騎士と彩刀が決闘だとよー。」

「おう！お前どっちに賭ける？」

「あの～彩刀って誰の事ですか？」

「ヒツ！許してくれー！その一つ知はぬお前やんのだよー。」

「…はい？」

この時俺の一いつ名が決定していた。

第11話 死闘の末の後始末（後書き）

主人公に二つ名がつきました。

さらに後に出て来た女と男の二人組、
お楽しみに！

感想などもお待ちしております。
では1-2話でお会い出来ることを、 、 、

第1-2話 決闘？（前書き）

こんには、

1-1話の訂正をしました。

Sランク報酬が1000Tではなく1000万Tでした。

指摘してくださった方ありがとうございました。

第1-2話 決闘？

いきなり決闘？を申し込まれて連れ出されてきた場所は真っ暗な森、
「何処ですか？ここ？」

俺は前にいる女の人に話しかける。

「あまり人が来なくて有名な森だよ。

安心していい。魔物は居ない。」

「そうですか。」

柚子はもう遅いからと置いてきた。

二人の間に沈黙が訪れる。もう一人の男は何も話さず、ただ歩くだけ

辺りの木が風で揺れて葉の擦れ合音が静かに聞こえる。

風が止むと俺達の歩く音しか聞こえなくなった。

とても静かな時間、ただ足を動かすだけの静かで退屈な時間、

「さて、ここへんでいいでしょ？」

その静寂な時間をいつの間にか足を止めた彼女が壊す。

「俺は何処でも、決闘と言われ着いて来ただけだからな。」

「それもそうね」

彼女は少し考えて、よしつ！と気合を入れると説明を始めた。

「貴方を此処に呼んだ理由、それは戦つてみたい、と言うのもあるけど、

もう一度あの技を見たいという方が強いわ。」

彼女は笑いながら話す。

「私はアリア、歳は…18歳、貴方と同じかしら？」

「俺は柊乖離、15歳だ。お前より3つ若い。」

「嘘…」

彼女は俯いてしまった。

「残念だったな？で決闘はするのか？姫騎士さん、」

彼女の一つ名を呼ぶ。彼女は苦笑いをしながら此方を見る。

「姫とか付いてるけど姫じゃないわよ？」

「知ってる。お前みたいな礼儀の無い奴が姫なわけないだろ？」

「姫騎士とか言うならアリアと呼びなさい。」

「そう、で？ アリア決闘は？」

「するわよ、じゃあそろそろ始めるか。」

彼女は男に合図をする。

男は小さく頷くと、

「試合、開始」

とても低い声で言った。

「はあ！」

同時にアリアは背中の剣を抜いて一瞬で間合いを詰めてきた。
俺はそれを闘氣で受け流し刀を抜いて応戦する。

ただ刀のぶつかり合い、魔法などを一切使わない斬り合い、
だが少しづつ俺の方が有利になつて来た。

隙を突いて斬り込んだがそこにアリアは居なかつた。

「やっぱり、普通の斬り合いでじゃ負けるよね。」

彼女は微笑んで言つ。

「当たり前、俺は魔法が使えないからな？」

「そうか、じゃあ魔法を使おうかな？」

「炎魔陣、裁き」

「四元素魔法拒絶」

俺の足元を炎の陣が柱となり全てを焼いた。

「全然、効かないよ？ アリア」

「なによ… その化け物技」

「俺の得意技だ！」

驚愕しているアリアを見ながら笑い、親指をグツと立てた。

「…なら化け物には化け物技を」

「隕石衝突」

俺は身構える、でも彼女は右手を空に挙げただけで何も起こらない。

「何も起こらないぞ？失敗か？」

俺は嘲笑しながら彼女を見る。

だが彼女は笑っている。

「待ちなさいよ、コレ制御難しいのよ？」

彼女はまだ空に手を出したまま、このまま何も起こないとthoughtた時、とてつもない衝撃波が俺を襲つた。

「つ！？」

俺は衝撃波のした方向、つまり上を見る。

「なんだよ！あれ

俺が見たものは直径2m程の大きな隕石だった。

「成功、かな？」

アリアは疲れた表情で此方を見る。

俺は何故アリアが右手を空に挙げているかようやく分かった。

アリアは制御していた。

魔力を使って隕石を引き寄せ、俺に当たるよつこ、

「さあ乖離！コレはあの刀の技じゃなきゃ無理でしょ？」

指摘してくる。それはそうだ、第一、あのが本当の隕石で、動かすだけに魔法を使っていたら、アレは魔法じやない、つまりディスペルは使えない。

残る方法はただ一つ、刀に纏つて消滅、または粉々にする。

「面倒くさい。」

流石に隕石を一発で消滅させる程の魔法があればいいが使えないなら、と考える。

「俺にしか出来ない技を使うしかないか。」

俺は刀を前に出して構える。

「闇刀、纏い」

「闇刀、闇狩り」

刀に黒い物が浮き出す。

それを隕石の真ん中に刺した。

隕石は斬れる、と言つより消える。

俺は半分にして、また半分にする。

後はがむしゃらに斬りまくる。

「ハツ！」

息が切れてくる。

隕石はどんどん小さくなり、最後には消滅して消えた。

「フウ～～

長く息を吐き出す。

心臓はまだバクバクと鳴つており、
息もハア、ハアと切れている。

「闇は疲れる」

そう、比較的闇は他の魔法よりも疲れる。

消滅させる程の威力だからかもしれないが…

「おい、アリア危ないだろ？」

「……隕石、消えた？」

アリアはまだ頭がごちゃごちゃしているようだ。
俺はアリアに刀を向けて言った

「俺の勝ち？だな」

「… そうね、あれ返されちゃ何もいえない」

「試合、終了…」

遅れて男の声が響く。

「帰るか…？」

「そうね、帰りましょう

俺達は元来た道を帰つて、ギルドに着いた。

俺もアリアと男に別れを告げて帰つた。

ちなみに元居た家は俺の寮の部屋が出来たのでお役御免になつている。

明日もマスターに呼ばれているからギルドへ行かなくてはいけない。俺は現実逃避しながら布団に入り、そのすぐ後には意識は無かつた。

第1・2話 決闘？（後書き）

今回は少し短かつたかと思います。
展開が分からなくなつてきました。
では1・3話でお会い出来ることを、
、

第13話 マスターの依頼（前書き）

「こんには、13話目です。

目標20話、がんばります！

え？ 短い？ 高望みはしない主義です！――！

ギルドに入るとマスターが待っていた。

週一の席へ入るためであつた。

俺は無言で後に着いていく

マスターたるやうな事を覽んでゐる。

「ええ、一応」

「どうだつた? アリアは」

「強かつたかかい？」

「ええ、一応、「隕石衝突」という技が反則級に…」

まあ、アリアはSランクという事になつてゐるか…本当は唯一の

アリシア・ビュート、最も強大で最も、四元素魔法の火と水と同じ才

リジナル、

衝突魔法を使う

二三

「まあ口くちは内密ないひつに頼たのむぞ。却かくてば他ほかの王国くわんこくが狀じょうが

「はあ、まあ俺は他の王国行つた事ないですから…」

主が泣き声で「かか子に机の話を」といふと、衝突魔法があらわす物を魔力で轟き衝突せざる、

天変地異が起こりかねない。普段は使用を禁止してゐるがな」

昨日バリバリ使つてたよーーー！！！あの人そんな危ない技を普通に！

「あ、お前はこの辺で」

「まあ、お前はこのギルドで2番手なんて言われてるからのおまづ勿論、アリアとお前が本気で戦えばどっちが勝つか分からぬ

が、」

「まあいいですよ、で今回呼んだ理由は？」

「おおー…やつじゅうた。実はちょっとやつて欲しい依頼があるんじ
や」

「やつて欲しい依頼？」

俺は首をかしげる。

「つむ、Sランク進級試験は知っているか？」

「…入つたばかりなので聞いてません。」

「なら説明する。ギルドではランクがあるがそのランクは依頼をすれば自然に上がる。

Aランクまではな？じゃがSランクからはそれぞれの能力を見るために何人かのSランク希望者を集めて試験を行い、合格ならSランクとなる。

そこで、お前にはSランク進級試験の試験官をやって欲しい。」

「俺が…ですか？一応、俺まだAランクですけど？」

「別に主ならしいじゅう？」

お主は試験受けなくともSランクになれるように私がしといた。」

「職権乱用！ってマスター俺の技1回しか見てないじゃないですか
！」

「まあアリアからも言われているし…いいんじゃないのかの？」

「適当！…酷く適当！…アリアもなに言つてんだ！」

「とにかく、そのSランク希望者…今回は3人じゃなく、
その者達が指定された魔物を倒せるか見てきてくれ。」

「うわっ！俺なんかめっちゃ生意気に思われそつ。」

「大丈夫、皆お前より年下だよ。」

「それはそれですげえな！？」

「さあ行つて來い、基本的手出しあは無用だからお前は見てるだけで

いい

「危なくなつたら助ければいいと?」

「そういうことじゅ、じゃあ頼んだぞ?」

「まあ、分かりました。どうせ今日は此処で暇つぶしでしたし、行つてきます。」

俺はマスターに会釈して、その場を離れた。

聞いておいた待ち合わせ場所に行くと、2人の男女が立っていた。

「君達がSランク試験を受ける子達?」

後ろから声を掛ける。

「は、はい!」

「あ? そうだけど、アンタ誰?」

上から女の子、男の子、である。

「俺は柊乖離、一応、君達のSランク試験の試験官だよ?」「ハア? こんな奴が試験官? ふざけんなよー・どう見ても俺より弱そ
うじやん! ?」

「ちょ、ちょっとといけないよ? そういう事言つたら、」

「いや? 事実だからいいよ? 俺もいきなりやれって言われたんだか
ら、」

「で、でも」

女の子の方はまだ納得しないようだ。男の子の方は…めつと偉そ
にしてる。

「いいつて、で? もう1人は? 3人のはずでしょ?」

「…寝坊します。多分…」

「つたくアイツはいつもそうだ。」

「『め~ん遅れた~、いやー昨日ちょっと疲れちゃって…さ?』

その子は俺を見て固まる。俺もその子を見て固まる。

柚子だった。昨日、一緒に依頼をした…

「柚子ッ! ?」

「お兄ちゃん!...?」

「へ?」

「は?」

全員が固まつた。

俺は柚子に依頼の試験官が俺と言つ事を話した。すると、

「お兄ちゃんが試験官!...? ヤツター、私頑張つちやうもん!...」

柚子のテンションが急に上がつた。

「あの〜、お兄ちゃんとは?」

女の子の方が話してくる。

「ん?あ!『レ私のお兄ちゃんだから、めっちゃ強いから!』

「オイ!てめえさつき自分で弱いって言つてたじやねえか!」

「さあ、まず自己紹介するか。俺の名前は言つたし、じゃあ君達の名前を」

「無視してんじやねえよ!」

男子、五月蠅いな?

「私、三月柚子、私は知つてるよね?お兄ちゃん?」

「あ、あの私、歌山^{かやま}ほのかです。よ、よろしくお願ひします。」

「チツ、柳良和^{やなぎよしがず}、」

3人の自己紹介が終わつた。

「じゃあ、俺に質問ある人、」

「ハイ柳君、どうぞ」

「お前は試験官、なら俺よりも強いのか?」

「お兄ちゃん強いつて良和^{よしかず}!お前なんてすぐ負けるよ?」

「つむせえ!柚子!俺はコイツに聞いてるんだよ!黙つてろ!」

俺を指差しながら怒鳴る良和、柚子とほのかは呆れている。

「う〜ん、俺つて強い基準分からないんだよね?」

「じゃあ魔法とかなんかやって見せよう!」

「いや、俺魔法使えないし、」

「は?」

柚子以外の2人は呆けている。

「魔法使えないのに、なんで試験官できるんだよ！」

「魔法は使えないけど…」こんなことなら「

俺は即座に刀を抜いて良和の首筋にあてる。

「つー？」

「それだけしかできねえのかよ？ただの刀術じゃねえか」良和は驚いたような顔になつたがすぐに笑つた。

「それ言われたら反論できないだろ？」

「はつ所詮こんなもんだろ？お前

「まあ、水刀、纏い」

俺は水を纏い、刀を蒼く光らせた。

「オイ、なんだよそれ！」

「火刀、纏い」

良和は驚いて動けなくなりギリギリ声を出していた。

「風刀、纏い」

「土刀、纏い」

「ま、コレで十分だろ？それとも、当てるか？」

「いや、もういい、四元素使われたら何もいえない。」

良和はすごんだ。

「お兄ちゃん！さすが～」

「…お兄ちゃん？ってどういうこと？でもあの人、すごい。」

「さあ、皆、俺なに討伐するか聞いてないから…案内ようしへー。」

「お兄ちゃん、理不尽すぎるよ…」

「お前、なにしにきたんだ？」

「で、でも面白い人でよかつた」

「だつて、これくらいしか聞いてないんだもん！」

「じゃあ行きがてらに教えてよ。

さあ3人共、Sランク試験の始まりだ——！」

第1-3話 マスターの依頼（後書き）

最近キャラクターを増やしきりで、つまらない気がします。
感想などをお待ちしております。
では、1-4話でお会い出来ることを、
、

第14話 試験官の義務（前書き）

こんにちは、最近投稿が遅れていますかね……
感想などをお待ちしております。
少しでも気に入った方は登録か評価を……

第14話 試験官の義務

俺は歩きながら目的の場所と目的の魔物の名前を聞いていた。

「それで？一体何処に行くんだ？」

「は、はい、目的地はクラーデ湿原と言つ所です。」

「聞いたこと無いな？じゃあ目的は？」

「えっと、クラーデ湿原に生息している、リザード蜥蜴です。

一応Aランク最上級クラスの魔物です。」

「そつかあ、まあ俺は見てればいいって言われたし、実力を見させてもらうよ」

「お兄ちゃんがいれば大丈夫だね？」

だつて^{ゲイター}巨鰐をほぼ一人で倒しちゃう化け物さんだもんね？」

「マジかよ…お前なんなんだよ」

「そんなにすごいの？アレ倒すの？」

「もういいや、お前とは一生張り合えない気がする。さて、そろそろ目的地のルアー^デ湿原だぜ？」

良和は呆れたように言つ。俺つてそんなに…？

「ところで、目当ての奴はあれか？」

「の、ようですね」

「てか、アイツ目立ちすぎだろ？」

「お兄ちゃん！パパッとやっちゃうから見ててね？」

俺が見た先には縁が広がる湿原に1匹、真っ赤な身体をした2足歩行トカゲ、

「シユルル？」

相手も此方に気がついた様だ。

「さて柚子の友達の力、見せてもらつか」

俺は軽く笑つて走つていいく3人の様子を見ていた。

「雷唱、雷狼」

良和は雷の系統らしい、

雷の狼が蜥蜴の身体に当たり焦げた。

「シユルル！？」

蜥蜴は間抜けな声を上げ、尻尾を振り回す。

「とどめつ！じゃあね？水の力にひれ伏せ！渦潮」

柚子の魔法で蜥蜴の身体から赤い液体が出て水が赤く染まる。

「シユルウ！」

痛みに耐え切れず蜥蜴が声を出す。

「ゲイターには効かなかつたけど、効くかな？」

「風水、風と水混ざりて全てを破壊する嵐となれ！烈風水！」

嵐の様な水が蜥蜴に襲い掛かる。

「シユルウ」

蜥蜴の声がだんだん弱くなり…消えた。

「やつたあ、お兄ちゃん！見てた？私の魔法？」

「ああ、すごいな？」

「ゆ、柚子は強いからね？」

「ケツ、俺だけでも倒せたつつうの！」

「ほのかの魔法はなんなんだ？」

俺は全然攻撃しなかつたほのかに聞いてみた

「わ、私は回復全般ですか…」

「そうなのか…てかお前ら倒すの早すぎない？」

「アソーツが弱かつたんだよ！ていうかお前いらなくね？」

「ぐう！そこを突かれると…痛い！」

良和の言葉のパンチが俺に届く。

(ギヤドロギヤドロ～～)

「ん？なんだ、足元で騒いでる奴？」

俺の足元に小さい虫がいた。

「あ、そ、その虫は呼虫と言つ魔物です。」

ほのかが言つ。

「え？ 魔物なの？ 弱そうだけど？」

「は、はい、固体としては最弱ですが… 声を出して周囲の魔物に助けてもらつ魔物です」

(ぎやくろがりてるーー)

「そ、そうです。こんな風に」

「ギャアアアア…！」

「はー！？」

俺達は声のした方を見る。

そこに居たのは金色の身体に真っ赤な瞳をした大きい龍、

「え？ 激しくデジャヴ…」

「え、えつとアレは… 金装龍《GUDRIJIN》ですね？… ヤバイです！

ランクSSSランクです！ アイツ！」

「おじおい、柚子よ… 俺が倒したあの鰐、Sだよな？」

「そそそ、そうだよ！ お兄ちゃん！ アレススだつてさ…」

「おい！ お前らそんな事してたらやばいぞ！ 逃げる…」

良和は皆で逃げようと言ひ出す

だがダメだ。相手はもう此方にきずいている。

逃げれば追われて一網打尽、どうするか…

「よしつ！ お前ら逃げる？ 俺足止めしてすぐ追つから…」

「え？ でもお兄ちゃんは…？」

「いいから… 行け、な？」

「お前！ 逃げるよ！ 試験官死んだら合格かわかんないだろ！」

良和は怒るように言ひ。

「じゃあお前ら、合格！ 良かつたよ！ でも…」

「SSSランクの試験は… まだ先だろ？」

俺は笑うようにして行かせた。

「お兄ちゃん… 帰つてね？」

「… 死ぬなよ？」

「つ、頑張つてください…」

柚子… そろそろお兄ちゃんつて言ひの、止めてくれないかな？…

「さあドラゴンさん、相手は俺一人じゃ不満？」

「ギャアア！」

ドラゴンは此方に目を向けて睨みつけて来る。

「じゃあ戦闘開始つて事で…先手！」

俺は刀を抜いて闘気を纏い跳躍してドラゴンの頭と同じ高さに飛び。

「水刀、纏い」

「水刀、水破天盧」

俺は最初から本氣で斬りかかった。

刀とドラゴンの2本の角が交差する。

激しい火花が散り、水で消える。

「…ギャアア」

「がつ！」

ドラゴンは俺の攻撃を諸共せず、頭で俺を叩き落す。

「ギャアア」

更に追撃で尻尾が叩きつけられた。

「…はあ無理…だろ？化け物じゃねえか」

俺は毒づきながら立ち上がる。

「一撃与えてやる…」

ドラゴンは炎を吐く。それも灼熱の炎、

「土刀、纏い」

「土刀、壌堅閃」

俺はルアーデと戦ったよりも頑丈な盾もじきを刀に形成する。

「ぐつ！」

防ぐ：届いてくる熱気はすさまじい

「防いだ！」

「氷刀、纏い」

「魔法刀、今ある魔力の全てを次の一撃に」

「氷刀、封氷傍」

刀をドラゴンの足に突き刺す

「ギャアアアアー！？」

ドラゴンの足に刺さった刀から氷がドラゴンを包み始める。

「封印の氷だよ、ドラゴンさん？」

「ギャア」

氷はドラゴンの足から足の付け根までで止まった。

「…全部覆いたかったけど無理だったか…」

俺は眩き刀を抜く。刀には固体化した血がついている。

「火刀、纏い…って魔力無いじゃん…」

固体化した血を溶かして落とそうとしたが魔力が無かつた。

「あ、もう無理…かな？」

俺はそこで倒れた。ドラゴンから少し離れた場所で倒れた。

「ギャアアー！！！」

ドラゴンは怒り、咆哮を上げる。だが氷はビビすら入らない…と思つ

俺はそこで意識を手放した。

第14話 試験官の義務（後書き）

「デジャヴしか思いつかなくなってきた…
最近キャラが把握できていないかもです…
では15話でお会いで来る事を、、、

第15話 神の救い（前書き）

「んにちは、日間学園ワンキングで8位でした。評価してくださる方々本当にありがとうございます。感想などをお待ちしております！」

第15話 神の救い

空間、何も無い空間、ただ水平線のように暗く先が見えない……
そんな場所に俺は立っていた。

寂しい、此処は何処だ？俺が知っている所か？
分からぬ、なにも分からなくなつてくる。

俺？俺つて……誰だ？

「此処は何処……なんだ？」

暗い空間、虚空の世界、

「此処？此処が何処か知りたいの？」

クスッと笑い声がして突然、暗闇の中から光が漏れ出した。

「誰……？」

俺はそこに居た女の事をしらない。

年齢は20歳くらい、髪が足元まで伸びている。

「私の事は知らないでいいの……そうね、神とでも呼んどいて」「神？なんで神がこんな暗い所に……？」

「フフッ、酷いな。キミを助けるために此処に来たのに」

「俺を助けるため？俺は何処も怪我なんてしていない！俺はずつと
此処で？」

俺は此処にずっと居たのか？」

分からぬ、なんで此処にいるか分からない、それより此処は何処？

「此処は君の昔の闇の心の中、捨てられた時に出来た……

怒りや悲しみなどの負の感情で出来た君だけの空間、」

「じゃあ俺はなんで此処に……？」

「貴方はさつきまでドラゴンと戦っていた。でも相手のドラゴンは
強い、

だから貴方は自分の魔力を氷に変えてドラゴンの下半身を一時的に
凍らせて、

倒れた。今貴方は瀕死状態、魔力は空っぽ、一回攻撃を喰らつただ

けなのに骨は粉々、

だから貴方は静かな場所で、誰にも邪魔されない場所で休みたいと思つた

「それが…此処だつてのか？」

「そう、此処が一番誰にも知られたくない、知られない過去の空間」

「俺はどうすればいいんだ？」

「生きる。この夢から抜け出して、ドラゴンから逃げ出す。

それかドラゴンを殺す」

「…無理だ。もう魔力が無い。逃げられないし戦えない、怖い怖い怖い」

「だから私が居るんでしょう？」

女は楽しそうに笑い、右手を俺の額に当ててきた。

「私は神、神の力、神力を貴方にちょっと上げる」

言い終わると彼女の手からとても暖かい光が伝わってくる。

「でも、与える神力は少量、そこから育つか、それは君次第なんだよ…乖離君」

「さあもう行きなよ。ドラゴンが氷を割るよ…そしたらなにか悔しいでしょ？」

彼女は笑いながら消える。俺は本来の目的を思い出す。

「試験官、か。やるんじゃなかつたな…」

俺は苦笑いしながら自分の手を見る。

この身体に外傷は無い。この身体に外傷は無いが本体はどうだろう。

「助けてやらないと…いけないよな」

俺が決意した途端、周りの暗い雰囲気が消え去つた。
明るい。光が反射して輝いている。

「ぐつ！」

身体の痛みが戻つてくる。

「神力！」

俺は貰つた力を使う、俺の身体を光が行き渡る。

身体の痛みはすぐに消えうせた。

目が熱い、また回りの雰囲気が変わる。

次は境界、鏡で全てが反射している。

俺の目は紅く輝いていた。その輝きは爛々と輝き、世界が変わる。

「はっ！」

寝ていた事に気付き、慌てて起き上がる、

目の前にはあのドラゴン、金装龍《Gドラゴン》が氷を割ろうとしていた。

「させない！」

身体に神力を纏う、身体に爛々と光が纏う。

「神刀、纏い」

「神刀、神極狩り」

足を踏み込んだ途端、俺はドラゴンの尻尾の辺りまで来ていた。今ので氷を全て割つた、いや斬つた。

「おい、ドラゴンよ、コレ次足行くけど喰らいたいか？」

「ギャア」

ドラゴンは目を開じて何かを話した。

そして目を開けて、翼を広げ飛び去った。

「フウ」

身体の神力が消える、消したんじやない、消えたんだ。

「確かに少ししか使えない、まあ使い方次第で多くなるとか言つてたよな」

あの状態でドラゴンと戦闘していたら多分また負けてたろう。

神力は一撃分くらいしか使えないから・・・

「帰るか...合格は証明しなきやな。」

俺は一步を踏み出して、また一步と歩き出した。

身体の痛みは全然感じない...いや直つた。

神力のお陰...かな?

神力を使うと目が紅く煌めく。

「神様、ありがとう」

生まれてこの方俺は神様を信じなかつた。
だけど今は信じよう。あの女の神を…

「…お兄ちゃん大丈夫かな?」

柚子達はギルドで乖離の帰りを待つていた。

マスターにはちゃんと報告した。

すぐにチームを編成して行くとしても相手がSUSUランクじゃ話にならない。

だから…今は待つしかない。

「柚子、そんな顔してんなよ、」

「良和！心配じやないの？私達を逃がしてくれたのにー！」

「心配だよ！だけど俺達が心配してどうなる問題じやないー！」

「もう良和なんて知らない！」

いつもなら…こんな喧嘩もほのかが仲裁して、二人を抑えるはずだが

「……」

ほのかは何も言わず、ただ座っているだけ、動かない。

「お兄ちゃん…死んでなんかないよね？ねえ、」

「…分からない、確かにアイツは強い、だけど相手はSUSUだ」

良和は顔を歪めて、下を向いた。

「くそつー！」

壁に手を殴りつける。

何度も、何度も、

「チクショー、アイツだけいい格好しやがって、」

殴った手から血が流れる。

「お兄ちゃん、返事してよ。ねえ生きてるよねーお兄ちゃんー！」

柚子が叫ぶ、ギルド内にその言葉が反響する。

「なんだ？柚子どうして怒鳴ってるんだ？」

「へ？お兄ちゃん？」

「ああ、柚子、大丈夫か？」

「お前っ！」

「乖離さん！」

「お兄ちゃんあああん」

驚いた様に固まる良和とほのか、柚子は俺に泣きながら飛び込んでくる。

「グスッ、お、お兄ちゃんあん」

泣いている柚子を受け止めるが…力が抜けて入らない。

「お兄ちゃん！？大丈夫？」

「ああ、でも魔力がもう無いんだよ。しばらく休ませてくれないか？」

「あ、う、うんごめんね？後で話しかせてよ？」

「ああ、楽しみにしてろ」

俺は笑い、のろのろとギルドの奥の部屋に入る。

「坊や！？大丈夫だったのかい？」

「ええ、まあでも疲れているんで寝ます。」

明日学園遅刻しといてください。」

マスターは分かつたと俺が歩くのを手伝ってくれた。

「あ、あと

俺は思い出したように言つ。

「3人とも合格です。Sランク認定してやつてください」

「…本当にアンタは変わってるね？まあいいさね分かった」
だから今は休めとマスターはソファーに寝かせてくれた。
俺はそのソファーの感触を感じる間もなく眠りに落ちた。

第15話 神の救い（後書き）

神様出しました。

今回はこれくらい・・・?

では第16話でお会い出来る!ことを、、、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9007x/>

various swoud

2011年11月4日22時42分発行